

2023 年度  
調査報告書

東京 23 区内 A 小学校 共同研究  
国際化が進む公立小学校における  
子どもの運動・スポーツ実態調査  
(速報値)



# 目次

<b>調査概要</b> .....	1
<b>1. 分析上の「移民」の背景・定義</b>	
1.1 子どもの出生国・日本在住歴 .....	3
1.2 子どもが家庭で話す言語 .....	4
1.3 保護者の第一言語・日本在住歴 .....	5
1.4 児童の言語アイデンティティ .....	6
1.5 本報告で用いる「移民」「日本人」の定義 .....	7
<b>2. 児童票(4～6年生)</b>	
2.1 学校の授業 .....	8
2.2 体育の単元 .....	9
2.3 学校生活 .....	10
2.4 平日の生活時間 .....	11
2.5 誰かと過ごす時間 .....	13
2.6 遊ぶ場所 .....	14
2.7 習いごと .....	15
2.8 得意なこと .....	16
2.9 授業以外で行ったスポーツや運動遊び .....	17
2.10 運動有能感・楽しさ .....	19
2.11 スポーツの価値 .....	20
<b>3. 保護者票(全学年)</b>	
3.1 学校選択理由 .....	21
3.2 学校満足度 .....	22
3.3 学校からの連絡 .....	23
3.4 教育戦略 .....	25
3.5 子どもとのスポーツ・運動遊び .....	26
3.6 子どもの運動能力の認知 .....	27
3.7 子どものスポーツへの期待 .....	28
3.8 子どものスポーツに関する悩み .....	29
3.9 家庭にあるスポーツ用品 .....	30
3.10 保護者のスポーツ実施頻度 .....	31
<b>速報版のまとめ</b> .....	32



## 調査概要

---

本事業は東京 23 区内にある公立小学校(以下、A 小学校とする)との共同事業である。同校には外国籍の児童、外国で生まれ育った児童、保護者が外国出身の児童など、外国につながる(外国にルーツのある)子どもたちが多く在籍する。ルーツのある国・地域としては、中国やネパールをはじめとしたアジアが多いものの、欧米の出身者も含まれ、生まれた頃から日本に居住する児童もいれば、来日して間もない児童もみられる。A 小ではそのような状況を強みとして捉え、学校経営方針に国際人の育成、世界に羽ばたき活躍できる児童の育成を掲げている。日本語学級があり、日本の生活習慣や学校生活に馴染みのない児童、日本語での会話や教科の学習が難しい児童に対して、個人やグループ単位での指導が行われている。また、2023 年度には多言語に対応した保護者会を開催するなど、さまざまな試みをしている。ほかにも同校では、高学年の教科担任制や英検・漢検を学校で受けられる体制の構築、学校行事や地域の伝統を大切に活動を進め、さらに体力向上につながる活動を検討するにあたり、今回当財団との共同研究に至っている。

しかし、国際化が進んだ小学校における運動・スポーツの研究は非常に少なく、A 小においても詳細は明らかになっていない。外国につながる子どもたちは日本で普段どのような運動・スポーツを経験しているのか。スポーツを通じた国際化一すなわち、日本国内でスポーツを通じた国籍を超えた共生は実現されているのだろうか。このような問いのもとに、全校児童および保護者を対象とした質問紙調査を実施し、まずは日常生活における具体的な経験の把握を試みた。

### 1) 調査概要

【調査方法】 学校通しによる自記式調査

【調査時期】 2023 年 10 月

【調査対象】 東京 23 区内にある公立小学校(A 小学校) 1~6 年生の児童および保護者

- ✓ 児童票は 1 年票、2~3 年票、4~6 年票にわけて内容や分量を調整した。
- ✓ 保護者票は全学年共通の内容とした。
- ✓ 各票、日本語版・英語版・中国語版・ネパール語版を作成し、回答しやすい版を選択してもらった。
- ✓ 日本語指導が必要な児童のなかには、日本語教室の教員による補助を受けて回答した者もいる。保護者については調査担当者が質問文の意味を説明しながら回答してもらったケースがある。

#### 【主な調査項目(児童)】

全学年共通の項目： 運動・スポーツが好きか/習いごと/生活習慣/遊ぶ場所

2 年生以上に共通の項目： 授業以外で行ったスポーツや運動遊び/運動有能感/好きなスポーツ/学校の授業/体育の単元/生活時間/体験・経験

4 年生以上に共通の項目： スポーツの価値/学校生活/誰かと過ごす時間/得意なこと/保護者との会話/希望進学段階/将来展望/言語アイデンティティ

#### 【主な調査項目(保護者)】

子どもとのスポーツ・運動遊び/子どもの運動能力の認知/子どものスポーツへの期待/子どものスポーツ

に関する悩み/家庭にあるスポーツ用品/保護者のスポーツ実施頻度/保護者が子どもの頃の運動・スポーツ/保護者の好きなスポーツ/学校選択理由/学校満足度/学校からの連絡/育児や教育の相談先/教育戦略/希望進学段階/家庭の背景(子どもの出生国・日本在住歴、子どもが家庭で話す言語、保護者の第一言語・日本在住歴)

## 【回収状況】

児童票 : 228名(回収率99.1%) うち中国語回答12名、英語回答3名、ネパール語回答3名  
保護者票 : 222名(回収率96.5%) うち中国語回答31名、英語回答3名、ネパール語回答4名

## 2) 体制

本研究は以下の体制で実施した(所属・肩書は2024年3月時点)。

A 小学校	校長、副校長、主幹教諭、体育主任
公益財団法人 笹川スポーツ財団	政策ディレクター 宮本 幸子 シニア政策オフィサー 松下 由季

質問紙作成や分析結果の解釈にあたっては、東京大学大学院准教授 高橋史子氏より助言をいただいた。同氏は移民や外国籍児童・生徒の教育からみるナショナリズム・エスニシティ研究を専門としている。

なお、本速報版に関しては笹川スポーツ財団がすべての執筆を担当した。

## 3) 調査結果を読む上での注意点

本報告書では、外国につながる(外国にルーツのある)家庭の児童・保護者の調査結果を「移民」、「移民」に該当しない家庭の児童・保護者の調査結果を「日本人」として区分している(具体的な定義は1章5節を参照)。「移民」は国連の定義によると「通常居住しているのとは異なる国に1年以上居住している人」であるが、本報告では日本での居住期間が1年未満の児童・保護者も含まれており、あくまで分析上の暫定的な定義として用いている。学術論文等においても、「移民」の定義は居住国をもとに考える場合、国籍をもとに考える場合など、状況に応じてさまざまである。

また、本調査は一地点・一校での事例研究であり、「移民」と「日本人」の結果の違いや解釈をほかのケースにそのまま適用できるものではない点に注意が必要である。

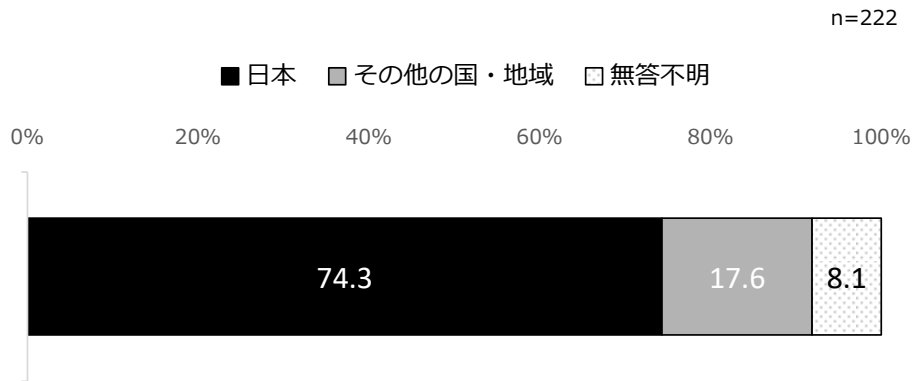
## 1. 分析上の「移民」の背景・定義

本章では外国につながる(外国にルーツのある)家庭について、調査結果から背景を確認し、2章・3章の分析における「移民」の定義を行う。なお、これらの項目は回答者への配慮から「差し支えなければお答えください」と依頼しており、無回答率が高い点には留意が必要である。

### 1.1 子どもの出生国・日本在住歴

子どもの出生国についてたずねたところ、「日本」が7割強、「その他の国・地域」が2割弱となった(図表 1-1)。「その他の国・地域」を選んだ人に具体的な国名・地域名を記入してもらったところ、最多は「中国」で、「ネパール」「フィリピン」などが続いた。さらに子どもの日本在住歴も記入してもらったところ、1年(1年未満も含む)～12年に分布し、平均値は4.5年、最多は「1年(未満も含む)」であった。

図表 1-1 子どもの出生国・日本在住歴

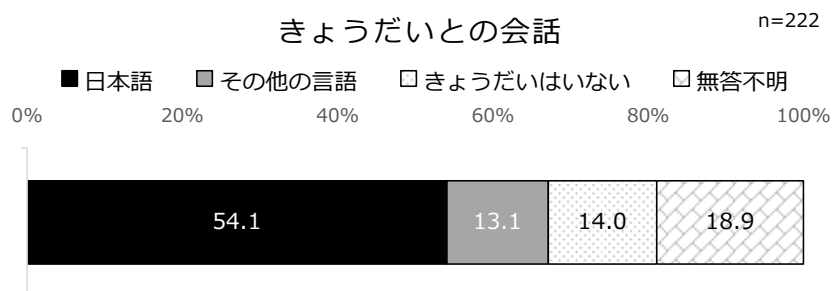
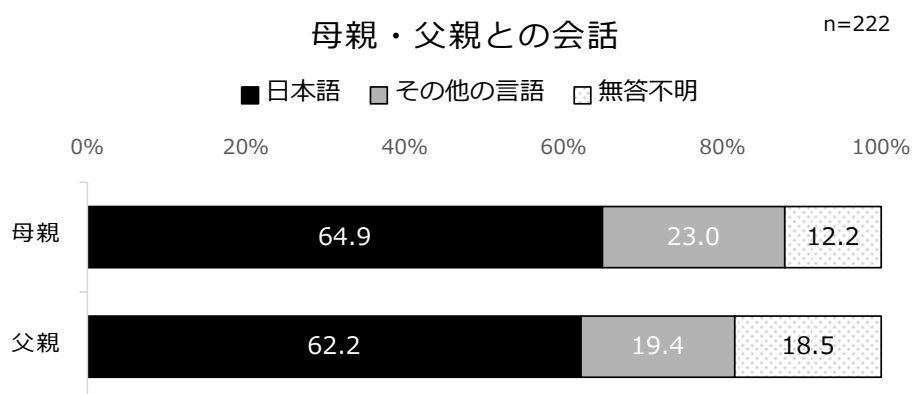


## 1.2 子どもが家庭で話す言語

調査対象の子どもが、家庭で母親(または母親に代わる方)・父親(または父親に代わる方)・きょうだいと、それぞれ主にどの言語で話すかを保護者にたずねた(図表 1-2)。日本語かその他の言語で選択してもらったところ、母親との会話・父親との会話ともに約 2 割が「その他の言語」で主に話していることがわかった。具体的な言語を記入してもらくと、母親・父親ともに「中国語」が最多で、ネパール語・英語などが続いた。きょうだいと「その他の言語」で主に話すのは 13.1%であった。

なお、母親との会話・父親との会話の両方において主に「その他の言語」で話すのは約 18%、いずれかの親と「その他の言語」で話しているのは約 25%という結果であった(図表割愛)。

図表 1-2 子どもが家庭で話す言語



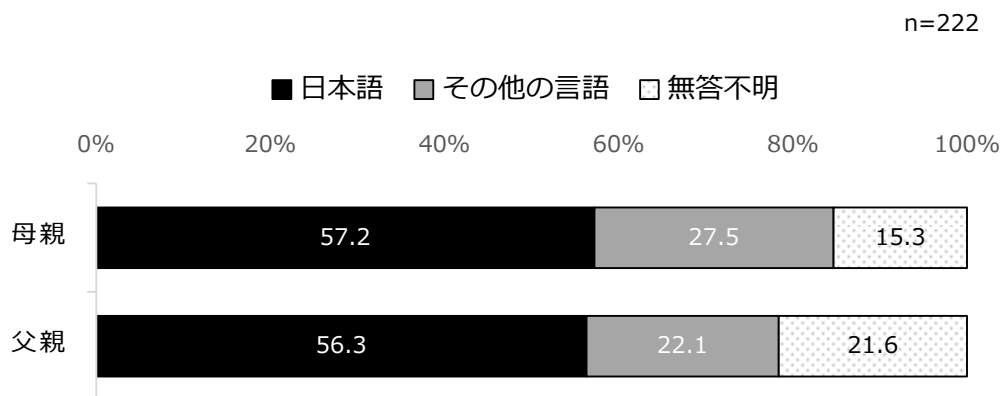


### 1.3 保護者の第一言語・日本在住歴

保護者の第一言語(最初に習得した言語)をたずねたところ、「その他の言語」を第一言語とするのは、母親の約3割、父親の約2割であった(図表1-3)。「その他の言語」を選んだ人に具体的な言語を記入してもらったところ、母親・父親ともに「中国語」が最も多かった。母親では英語・ネパール語・タガログ語などが続き、父親ではネパール語・英語などが続いた。いずれも複数の言語を記入するケースがみられた。なお、両親ともに第一言語が「その他の言語」である比率は約20%、いずれかの親の第一言語が「その他の言語」である比率は約30%であった(図表割愛)。

第一言語で「その他の言語」を選んだ人には、日本在住歴も記入してもらった。在住歴は1年(1年未満を含む)～45年に分布し、平均値は15年であった。母親・父親ともに最多は「20年」で回答の2割程度を占め、母親は「10年」、さらに「1年」「7年」が同率で続いた。父親では「8年」、「10年」「15年」の順に多かった。

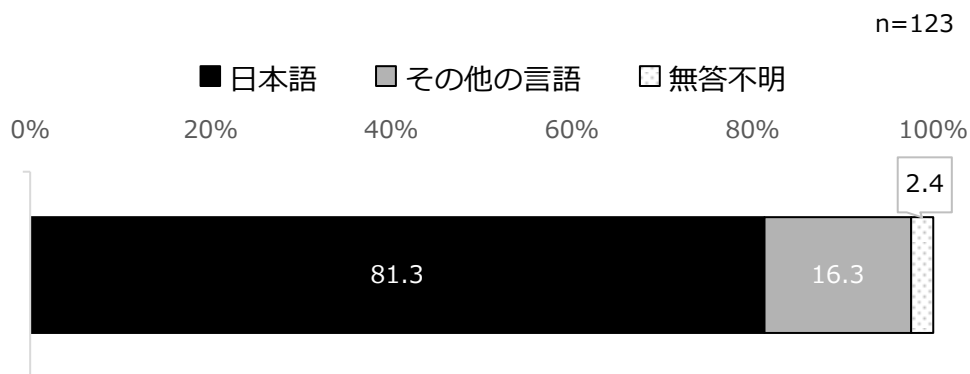
図表 1-3 保護者の第一言語



#### 1.4 児童の言語アイデンティティ

4～6年生の児童に対しては、自分の気持ちや考えを最も伝えやすい言語をたずねた(図表 1-4)。「日本語」と「その他の言語」から選択してもらったところ、約 8 割が日本語、16.3%が「その他の言語」であった。具体的な言語では中国語が最も多く、ネパール語・英語と続き、複数の言語を記入する児童もみられた。

図表 1-4 児童の言語アイデンティティ

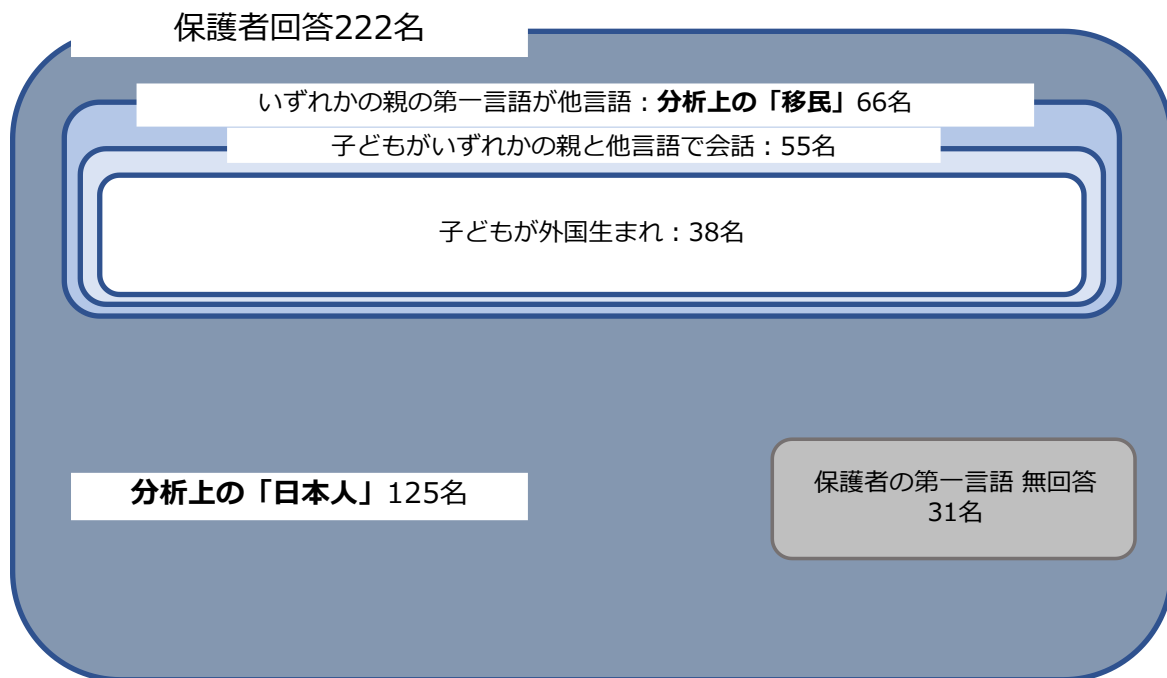


## 1.5 本報告で用いる「移民」「日本人」の定義

本調査においては「子どもの出生国」「子どもが家庭で話す言語」「保護者の第一言語」の3項目を、児童や家庭の背景(外国とのつながり)を識別する変数として用いることができる。本報告の2章・3章の分析では、いずれかの保護者(ひとり親の場合も含む)の第一言語が「その他の言語(日本語以外)」であるケースを「移民」、すべての保護者(ひとり親の場合も含む)の第一言語が「日本語」の場合を「日本人」として区分する。調査概要にも記した通り、ここでの「移民」「日本人」はあくまで本調査における分析上の定義にすぎず、日本全体の「移民」に適用できる知見ではない点に注意が必要である。なお、第一言語をたずねる質問に無回答であったケースは除外して分析したため、「移民」の保護者は66名、「日本人」の保護者は125名となる。2章で分析する4～6年生の児童については、「移民」33名、「日本人」68名であった。

回答を分析すると、子どもが外国生まれの児童・保護者、子どもがいずれかの親と他言語で会話する児童・保護者はすべて、「移民」に含まれていた(図表1-5)。主要調査項目については「子どもの出生国」「子どもが家庭で話す言語」を用いた区分でも分析したが、大きな傾向に違いはみられなかった。

図表 1-5 本報告で用いる「移民」「日本人」の定義



## 2. 児童票(4～6年生)

調査では全学年の児童から回答を得ているが、本章では最も質問項目の多い4～6年生の回答を分析する。

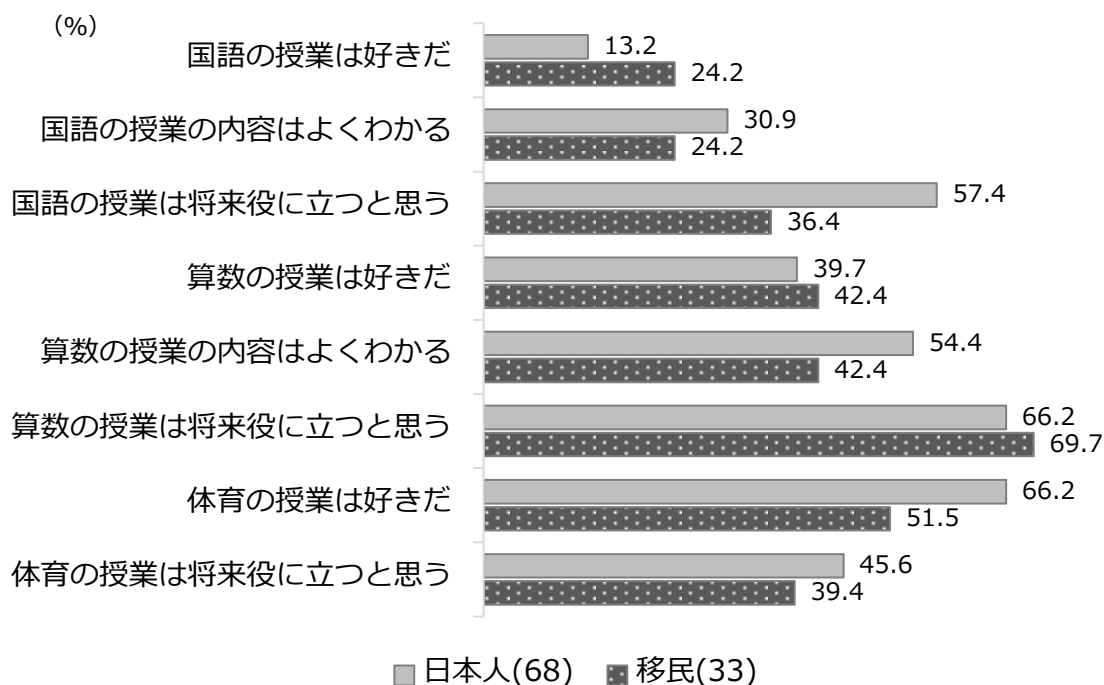
### 2.1 学校の授業

国語・算数・体育の授業について、好きかどうかや将来役に立つと思うかをたずねた(図表 2-1)。なお国語に関しては、その時間に日本語教室で授業を受けている児童は、日本語教室について回答をしている。

「好きだ」という設問に対して「とてもあてはまる」と回答した比率をみると、日本人は国語 13.2%、算数 39.7%、体育 66.2%となり、体育を好きと思う比率が圧倒的に高い。一般的に児童を対象とした調査では体育や図工などの実技・技能系教科の人気が高い結果が多く、A 小学校においても同様の傾向といえる。移民では国語 24.2%、算数 42.4%、体育 51.5%であり、国語と算数が好きな比率は日本人を上回る一方で、体育に関しては下回っている。

国語・算数のみでたずねている「よくわかる」という設問に対する回答をみると、国語は日本人 30.9% > 移民 24.2%、算数は日本人 54.4% > 移民 42.4%と、いずれも日本人のほうが高かった。また、「将来役に立つと思う」という設問に対する回答では、国語は日本人 57.4% > 移民 36.4%と大きな差が生じたのに対して、算数はいずれも7割弱、体育は4割前後と、明確な差はみられなかった。

図表 2-1 学校の授業



注) 「とてもあてはまる」の%。

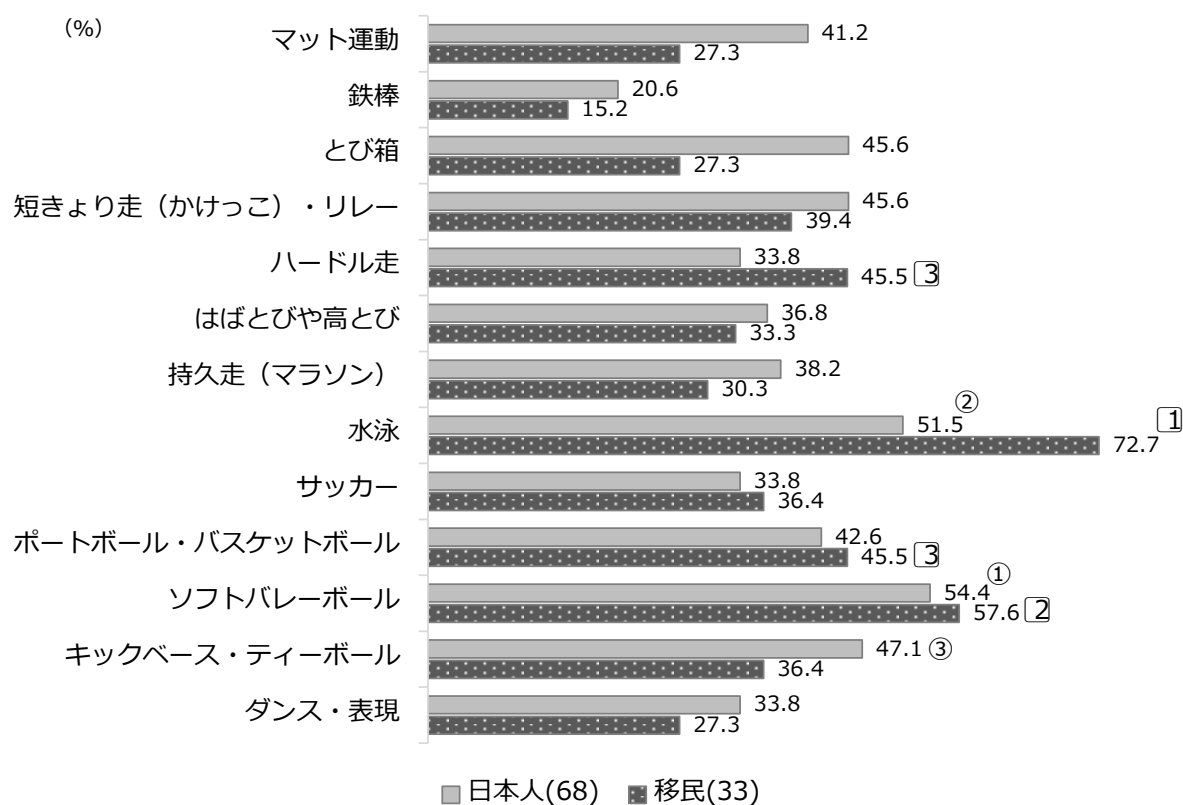
## 2.2 体育の単元

体育の各単元の内容について、好きかどうかをたずねた(図表 2-2)。学習指導要領上では 2 学年ごとに具体的な内容が示されているが、本調査では 4～6 年の 3 学年に対して 1 種類の質問紙を使用するため、学年を超えてある程度共通する内容を取り上げている。調査項目では指導要領上の単元名をそのまま使用せず、児童が理解しやすい具体的な運動・スポーツの名称で表現し、「ゲーム(4 年)/ボール運動(5・6 年)」に関しては実際に A 小で実施している球技を入れている。

各単元を「好き」と回答した比率をみると、日本人では「ソフトバレーボール」54.4%、「水泳」51.5%、「キックベース・ティーボール」47.1%の順に高く、移民では「水泳」72.7%、「ソフトバレーボール」57.6%、「ハードル走」「ポートボール・バスケットボール」45.5%と続く。「水泳」や「ソフトバレーボール」は共通して人気が高く、特に移民の「水泳」は日本人を 21.2 ポイント上回る。日本に来てはじめてプールを経験する児童もいて、楽しんで取り組んでいた様子が見ええる。

一方で「マット運動」「鉄棒」「とび箱」といった器械運動の単元では、いずれも日本人より移民の比率が下回り、5～18 ポイント程度の差がみられる。馴染みのない児童も多く、移民の指導における難しさが浮かび上がる。

図表 2-2 体育の単元



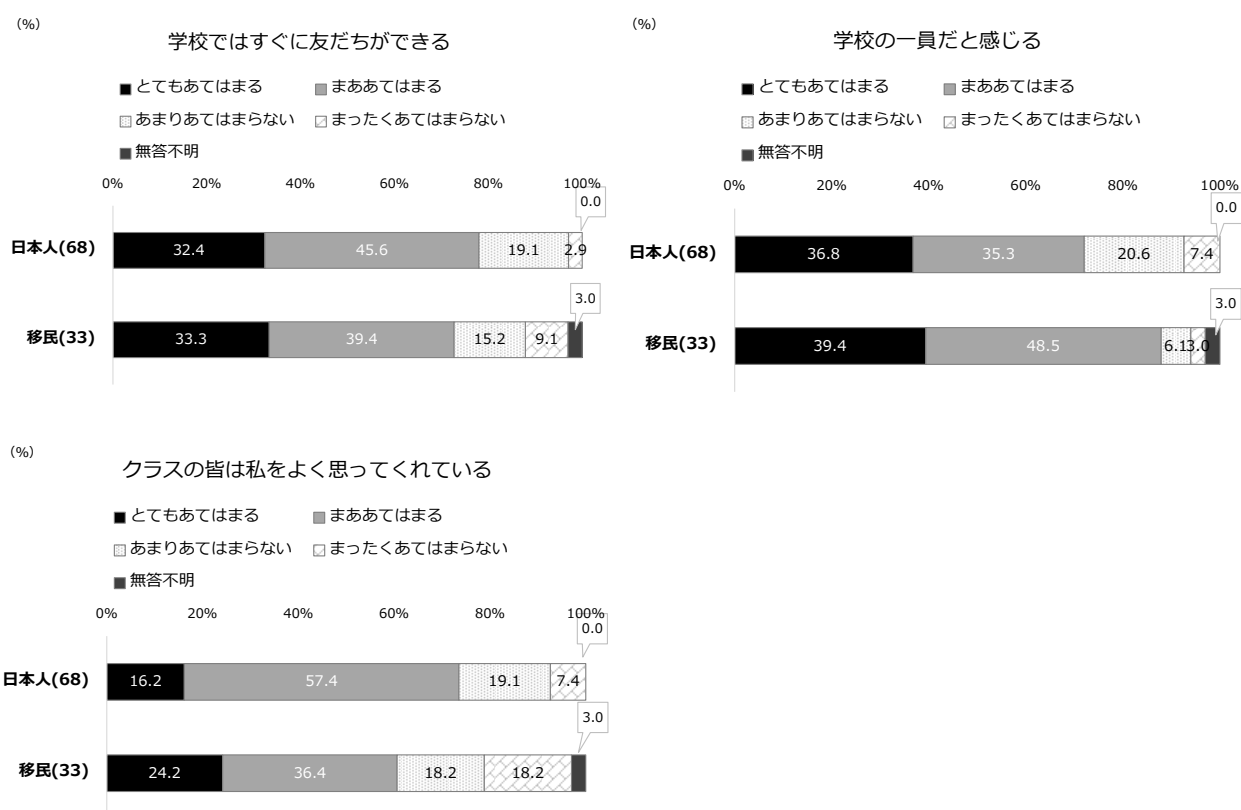
注 1) 「好き」の%。

注 2) 日本人・移民それぞれ上位 3 項目に、1～3 の番号を付している。

## 2.3 学校生活

PISA2022 (OECD 生徒の学習到達度調査)における学校への所属感の質問項目を参照し、A 小での生活についてたずねた(図表 2-3)。「学校ですぐに友だちができる」は「とてもあてはまる」と「まああてはまる」の合計値を算出すると、日本人 78.0%、移民 72.7%で大きな差はみられない。「学校の一員だと感じる」で同様に合計値を確認すると、日本人 72.1%、移民 87.9%で、移民のほうが約 15 ポイント高い。「クラスの皆は私をよく思ってくれている」では日本人 73.6%、移民 60.6%と日本人のほうが高い。移民では 24.2%が「とてもあてはまる」と回答する一方で、「まったくあてはまらない」も 18.2%であり、同級生に受け入れられていると感じる児童とそうでない児童がいることがわかる。

図表 2-3 学校生活



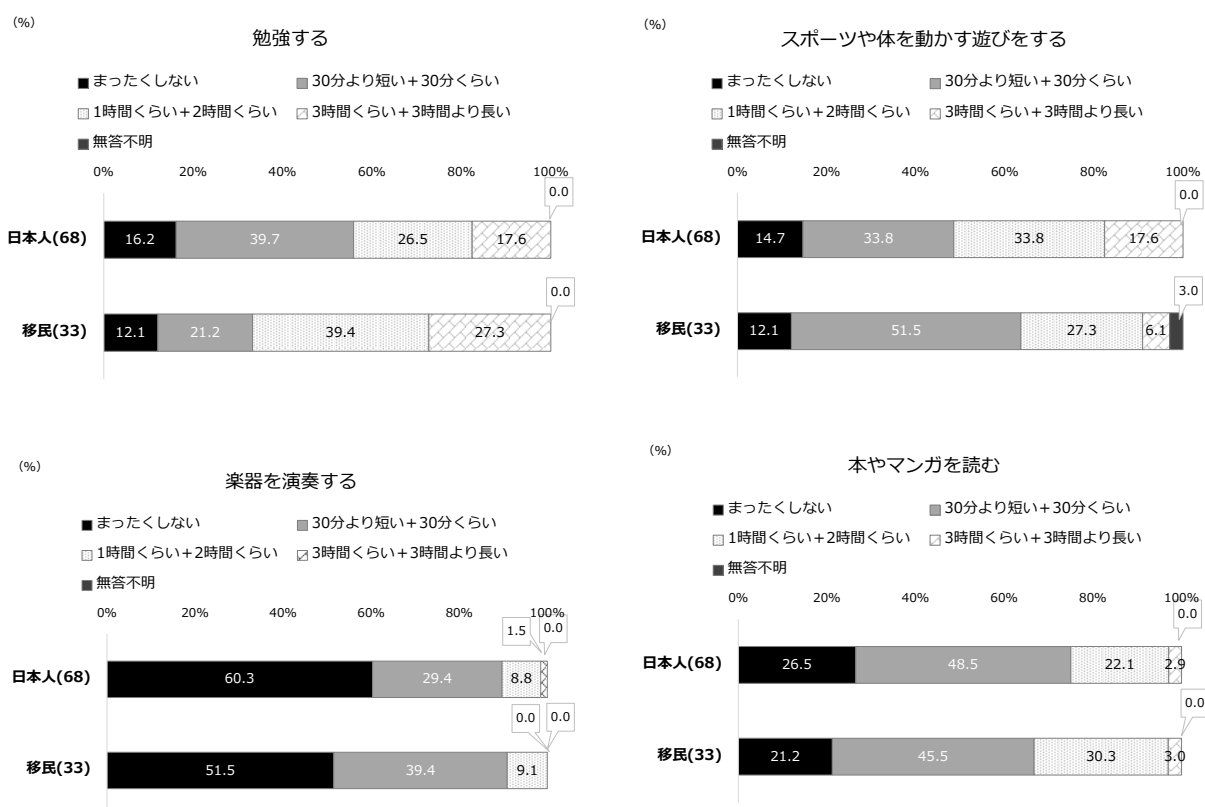
## 2.4 平日の生活時間

平日の生活時間について、「まったくしない」～「3 時間より長い」の 7 段階でたずね、いくつかのカテゴリを合計した値を示した(図表 2-4)。

「勉強する」は日本人では「30 分より短い+30 分くらい」39.7%、移民では「1 時間くらい+2 時間くらい」39.4%がそれぞれ最多となる。7 節の習いごとでも示すように、移民には中学受験に向けた通塾をしている児童が多い点も影響していると考えられる。ほかに移民のほうが時間の長い傾向にある項目としては、「楽器を演奏する」「本やマンガを読む」があげられる。「楽器を演奏する」では「まったくしない」が日本人 60.3%>移民 51.5%であるのに対して、「30 分より短い+30 分くらい」は日本人 29.4%<移民 39.4%と 10 ポイントの差がみられる。「本やマンガを読む」では「1 時間くらい+2 時間くらい」が日本人 22.1%<移民 30.3%と、若干移民のほうが高くなっている。

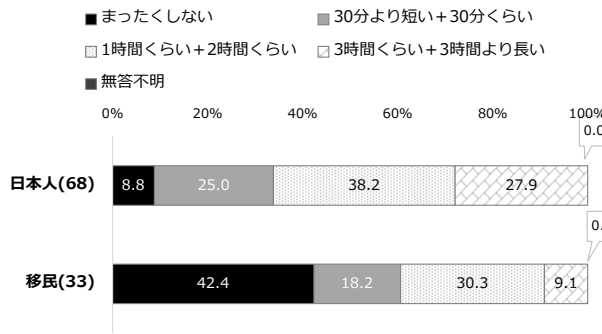
一方で、「スポーツや体を動かす遊びをする」「テレビを見る」「ゲーム機で遊ぶ」は、日本人のほうがより長時間に分布している。特に「テレビを見る」「ゲーム機で遊ぶ」は移民の場合「まったくしない」の比率が 4～6 割程度と高く、スクリーンタイム全体が短い状況が推察される。

図表 2-4 平日の生活時間



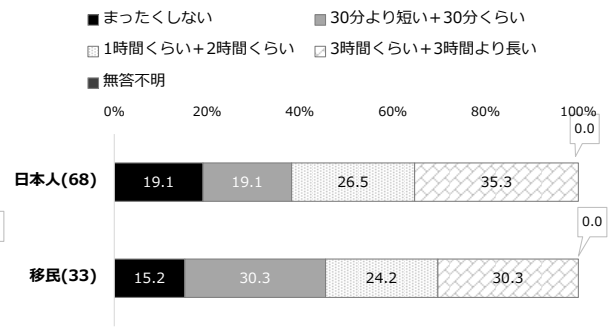
(%)

### テレビを見る



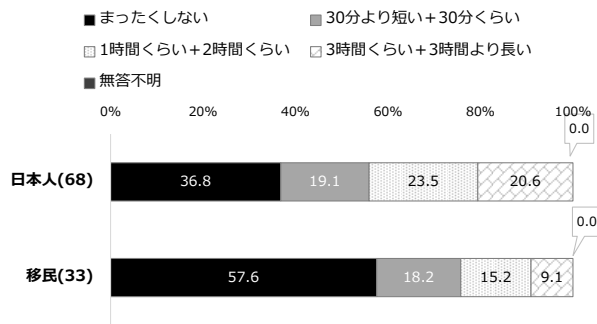
(%)

### スマホやタブレットを使う



(%)

### ゲーム機で遊ぶ





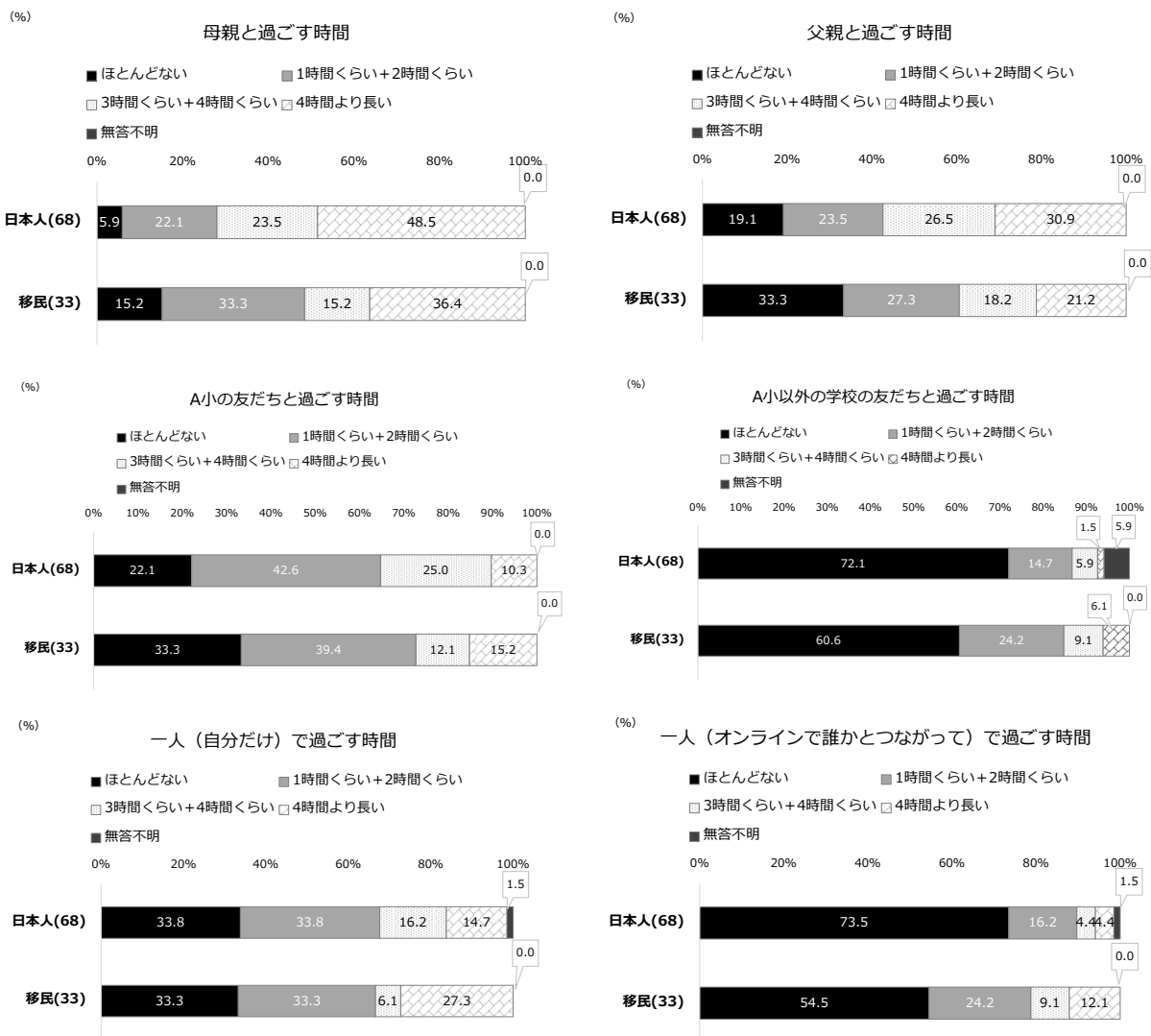
## 2.5 誰かと過ごす時間

放課後に誰とどのくらいの時間を一緒に過ごしているのかをたずねた(図表 2-5)。就寝中は除き、家族や親族に関して一緒に暮らしていない場合には「ほとんどない」を選択してもらっている。

まず母親と過ごす時間については、日本人では「4 時間より長い」が 48.5%と半数近くであるのに対して移民では 36.4%で、「ほとんどない」「1 時間くらい+2 時間くらい」が多くなる。父親と過ごす時間も同様の傾向がみられる。友だちと過ごす時間をみると、A 小の友だちに関しては移民では「ほとんどない」が 33.3%と日本人に比べて高い一方で、「4 時間より長い」児童も 15.2%いる。A 小以外の学校の友だちと過ごす時間をみると、移民では「ほとんどない」が 60.6%で日本人よりも約 10 ポイント低く、「4 時間より長い」は 6.1%である。総じて日本人と移民の児童が友だちと過ごす時間には明確な長短の差はないものの、移民では A 小以外の学校の友だちと過ごしている児童がやや多い特徴が見出せる。

最後に一人で過ごす時間をみると、自分だけで過ごす時間は移民で「4 時間より長い」が 27.3%と多い傾向にある。また、一人だがオンラインで誰かとつながって過ごす時間は、「ほとんどない」が日本人よりも約 20 ポイント低い 54.5%で、「4 時間より長い」は 12.1%である。

図表 2-5 誰かと過ごす時間

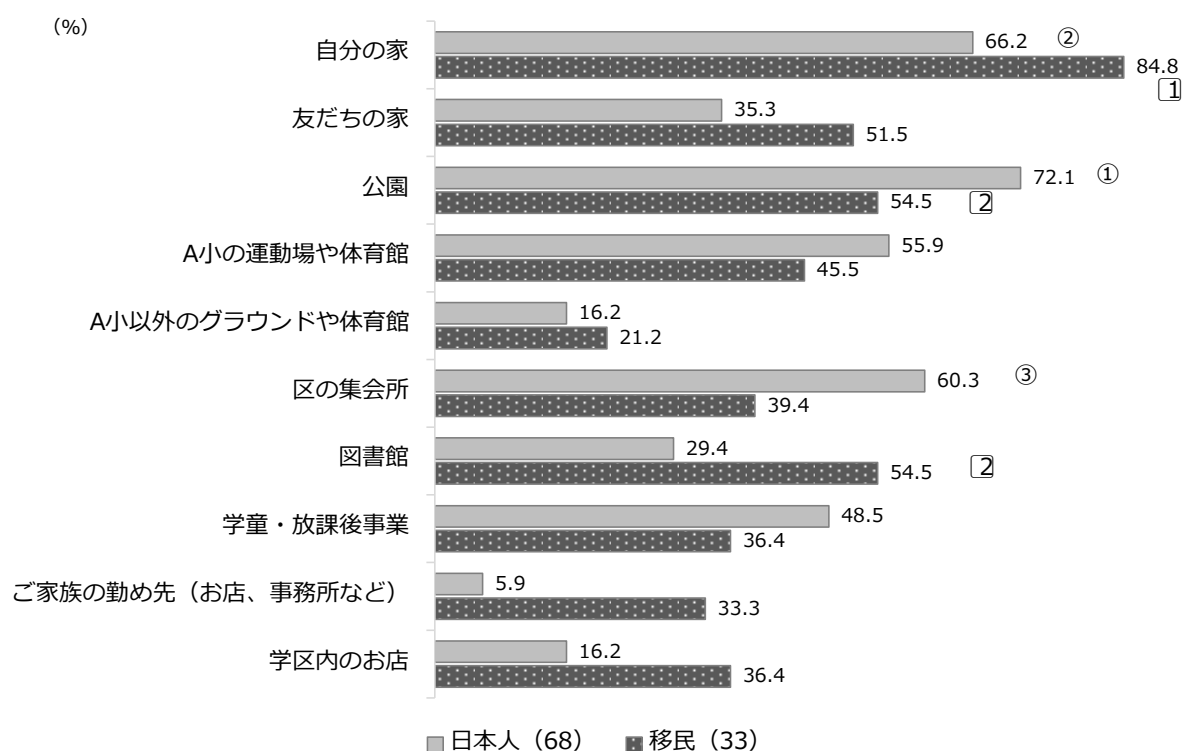


## 2.6 遊ぶ場所

ふだん遊んでいる場所についてたずね、「よく遊ぶ」と「ときどき遊ぶ」の合計値を示した(図表 2-6)。日本人では「公園」72.1%、「自分の家」66.2%、「区の集会所」60.3%の順に多く、移民では「自分の家」84.8%、「公園」および「図書館」54.5%と続く。両者の差をみると、「自分の家」「友だちの家」「図書館」「ご家族の勤め先」「学区内のお店」は、移民のほうが 20 ポイント前後高い。「ご家族の勤め先」は日本人が 5.9%であるのに対して移民では 3 割に達し、家族が勤めるお店や事務所で時間を過ごす児童が多いことがわかる。

反対に「公園」「A 小の運動場や体育館」「区の集会所」「学童・放課後事業」では、日本人のほうが 10 ポイント以上高い。多くの日本人児童が遊ぶ公的な場所では、移民の児童が日本人ほどには遊んでいないという事実は、子どものスポーツや運動遊びの環境を考える上で重要な知見といえる。

図表 2-6 遊ぶ場所



注 1) 「よく遊ぶ」+「ときどき遊ぶ」の%。

注 2) 日本人・移民それぞれ上位 3 項目に、1~3 の番号を付している。

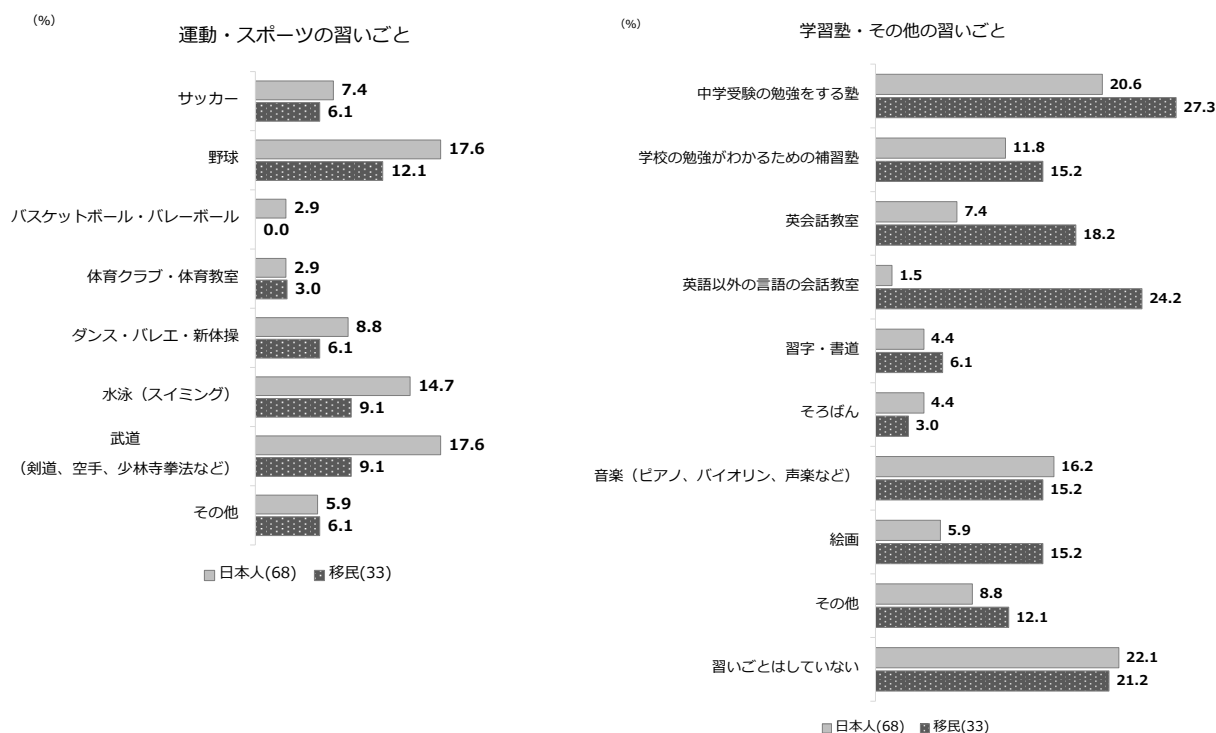
注 3) 「区の集会所」「学童・放課後事業」については、質問紙では具体的な施設名や事業名でたずねている。「区の集会所」は集会室や子どもの遊び場などを備えた区の施設である。

## 2.7 習いごと

現在行っている習いごとについてたずねた(図表 2-7)。末尾の選択肢「習いごとはしていない」をみると、日本人・移民のいずれも2割強で差はみられない。

運動・スポーツの習いごとでは、日本人では「野球」および「武道」17.6%、「水泳」14.7%の順に多く、移民では「野球」12.1%、「水泳」および「武道」9.1%と続き、全体的に日本人の比率のほうが高い傾向にある。学習塾・その他の習いごとをみると、日本人では「中学受験の勉強をする塾」20.6%、「音楽」16.2%、「学校の勉強がわかるための補習塾」11.8%となり、移民では「中学受験の勉強をする塾」27.3%、「英語以外の言語の会話教室」24.2%、「英会話教室」18.2%と続く。東京 23 区内という中学受験者の多い地域ではあるが、中学受験に向けた通塾は移民のほうが若干多いことがわかる。また英会話や保護者の第一言語(主に中国語)の会話教室に通う比率も高く、日本人とは異なる傾向がみてとれる。

図表 2-7 習いごと



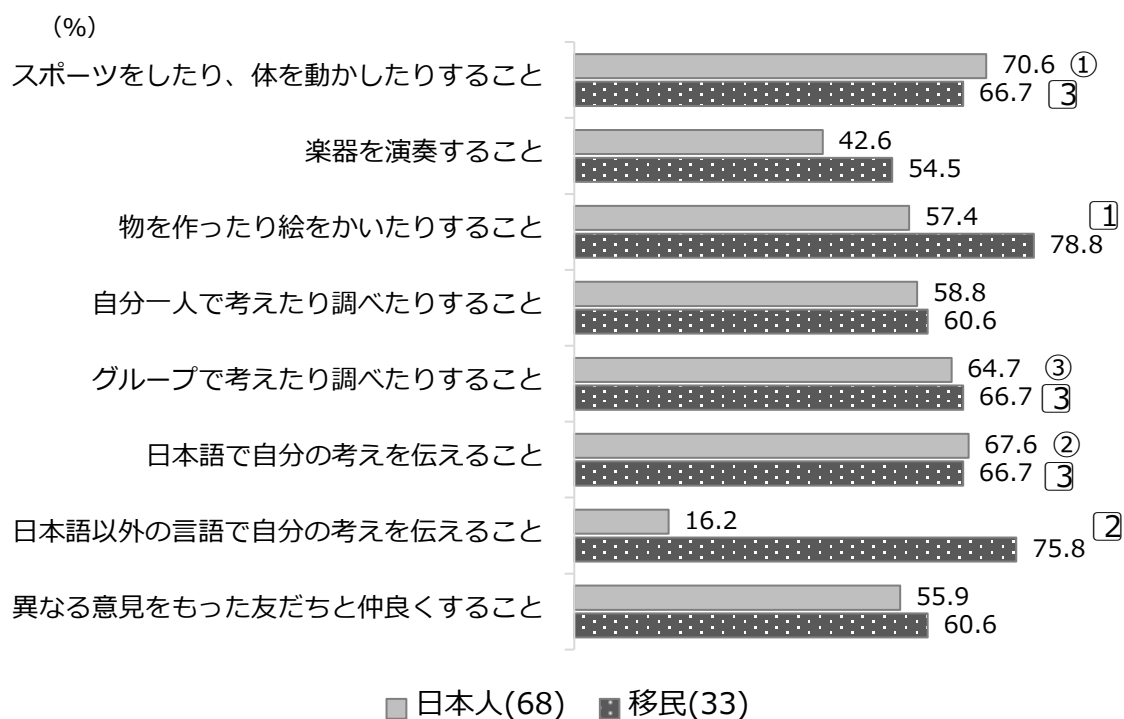
注) 複数回答。

## 2.8 得意なこと

子どもたちが得意に思っていること・苦手に思っていることをたずね、「とても得意」と「やや得意」の合計値を示した(図表 2-8)。日本人では「スポーツをしたり、体を動かしたりすること」70.6%、「日本語で自分の考えを伝えること」67.6%、「グループで考えたり調べたりすること」64.7%の順に多く、移民では「物を作ったり絵をかいたりすること」78.8%、「日本語以外の言語で自分の考えを伝えること」75.8%、「スポーツをしたり、体を動かしたりすること」「グループで考えたり調べたりすること」「日本語で自分の考えを伝えること」66.7%であった。

全体的に移民の児童は「得意」と回答する比率が高い。特に「日本語以外の言語で自分の考えを伝えること」は日本人を約 60 ポイント上回るが、「日本語で自分の考えを伝えること」では両者の差はみられない。

図表 2-8 得意なこと



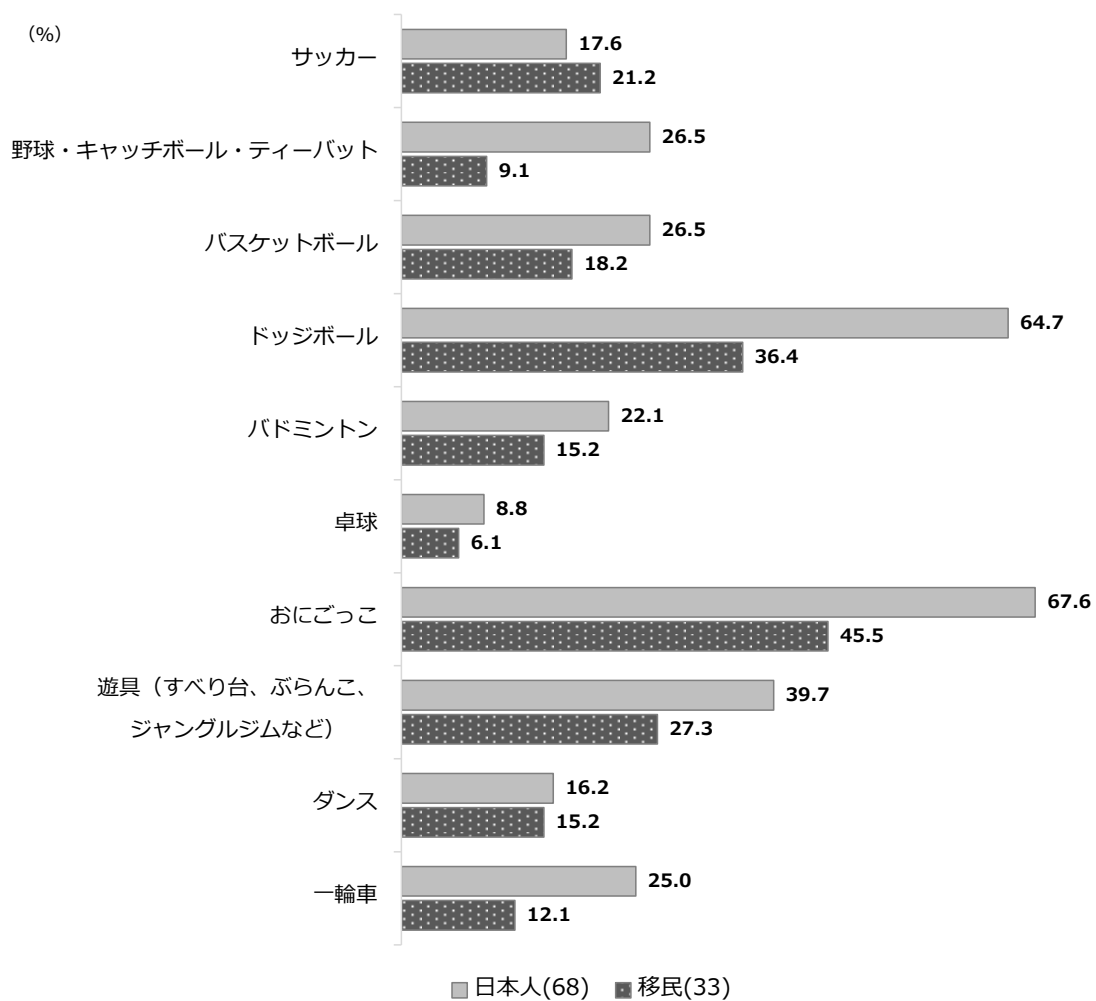
注 1) 「とても得意」+「やや得意」の%。

注 2) 日本人・移民それぞれ上位 3 項目に、1~3 の番号を付している。

## 2.9 授業以外で行ったスポーツや運動遊び

子どもたちが今の学年になってから学校の授業以外で行ったスポーツや運動遊びの内容をたずねた。最初に休み時間や放課後など、学校で行った内容を示す(図表 2-9-1)。「サッカー」のみ日本人 17.6% < 移民 21.2%と、移民のほうがわずかに高いものの、それ以外の種目ではすべて日本人のほうが高い。特に差が大きいのは「野球・キャッチボール・ティーバット」(日本人 26.5% > 移民 9.1%、以下同)、「ドッジボール」(64.7% > 36.4%)、「おにごっこ」(67.6% > 45.5%)で、20~30ポイント程度の開きがみられる。同じように学校で遊んでいてもその内容は異なり、多くの日本人児童に馴染みのあるドッジボールやおにごっこといった集団での遊びには積極的に参加していない移民の児童もいる様子が見えてくる。

図表 2-9-1 学校で行ったスポーツや運動遊び

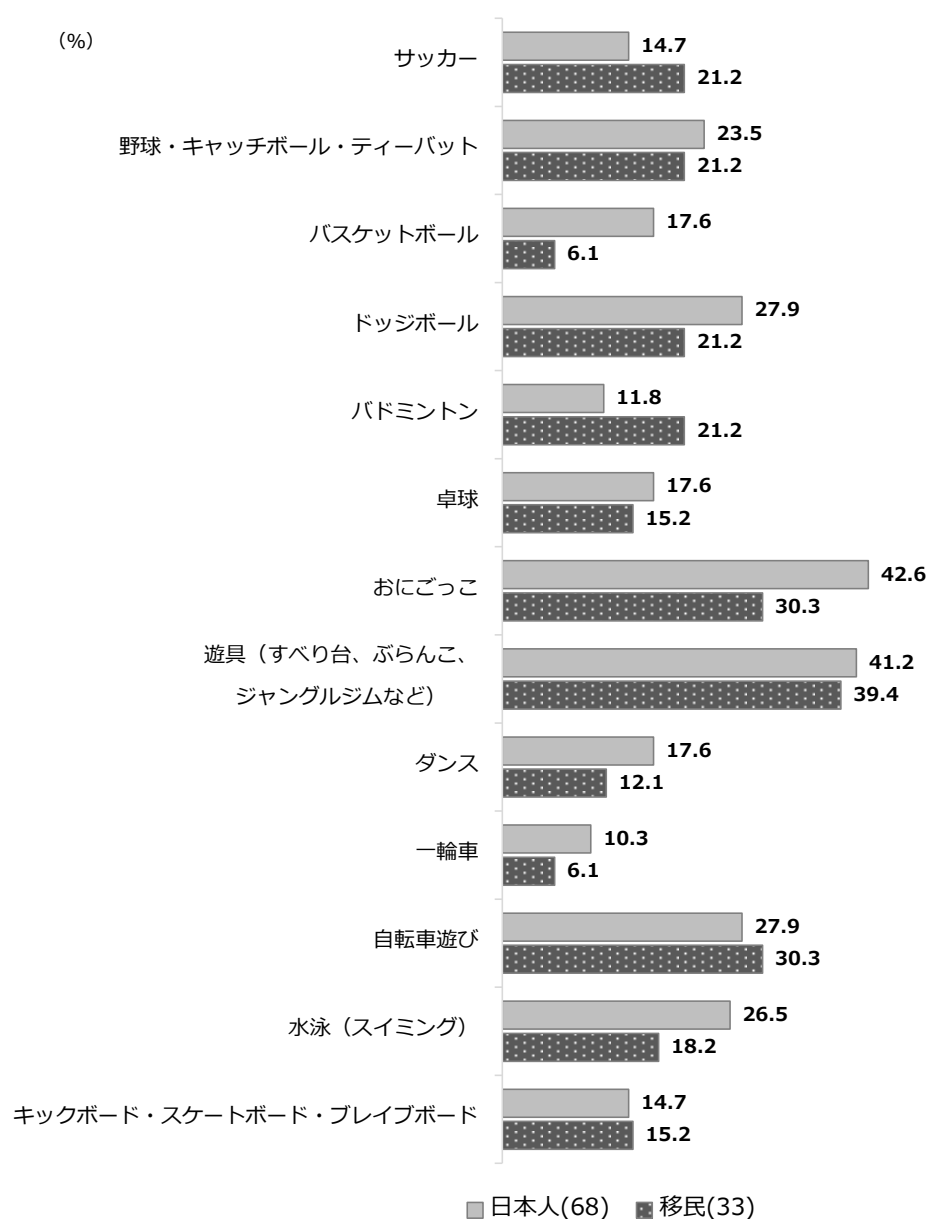


注) 複数回答。

続いて学校以外の場(習いごとを含む)で行ったスポーツや運動遊びの内容を示す(図表 2-9-2)。日本人のほうが多いものには、「バスケットボール」(日本人 17.6%>移民 6.1%、以下同)「おにごっこ」(42.6%>30.3%)「水泳」(26.5%>18.2%)があげられる。ただし、図表 2-9-1 で示した学校で行ったスポーツや運動遊びに比べると差は小さい。

一方で、「サッカー」(14.7%<21.2%)「バドミントン」(11.8%<21.2%)は移民のほうが多い。また、「野球・キャッチボール・ティーバット」「卓球」「遊具」「自転車遊び」などではほとんど差がみられない。全体的に日本人と移民のスポーツや運動遊びの内容に大きな違いはないものの、比較的少人数で実施できる種目で移民の比率が高い傾向にある。

図表 2-9-2 学校以外で行ったスポーツや運動遊び



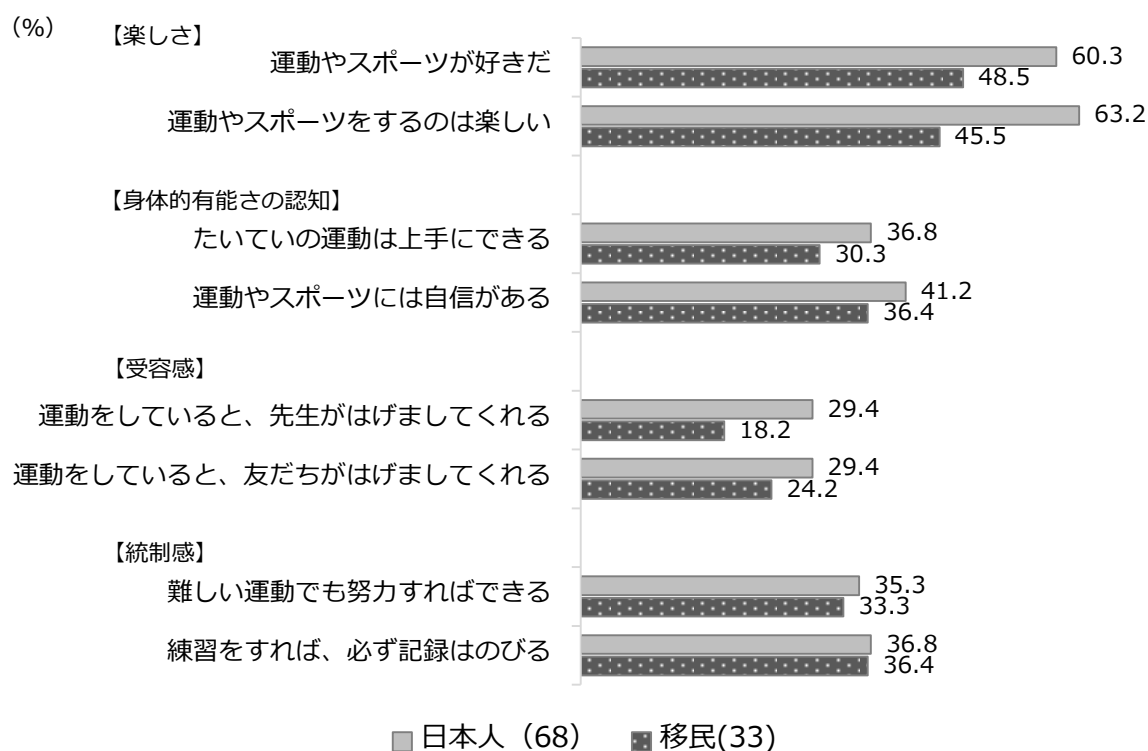
注) 複数回答。

## 2.10 運動有能感・楽しさ

運動有能感や運動・スポーツの楽しさについてたずねた(図表 2-10)。「運動やスポーツが好きだ」「運動やスポーツをするのは楽しい」はともに日本人が 6 割を超えたのに対して、移民は 5 割を下回った。身体的有能さの認知(「たいていの運動は上手にできる」「運動やスポーツには自信がある」)や統制感(「難しい運動でも努力すればできる」「練習をすれば、必ず記録はのびる」)では顕著な差はみられなかった。

受容感をみると、「運動をしていると、友だちがはげましてくれる」の差は小さかったが、「先生がはげましてくれる」では日本人 29.4%>移民 18.2%と 10 ポイント以上の差がみられた。学校で積極的にスポーツや運動遊びに参加できない児童(9 節参照)や、日本語での会話が難しい児童がいる中での指導の難しさを感じさせる結果でもある。

図表 2-10 運動有能感・楽しさ

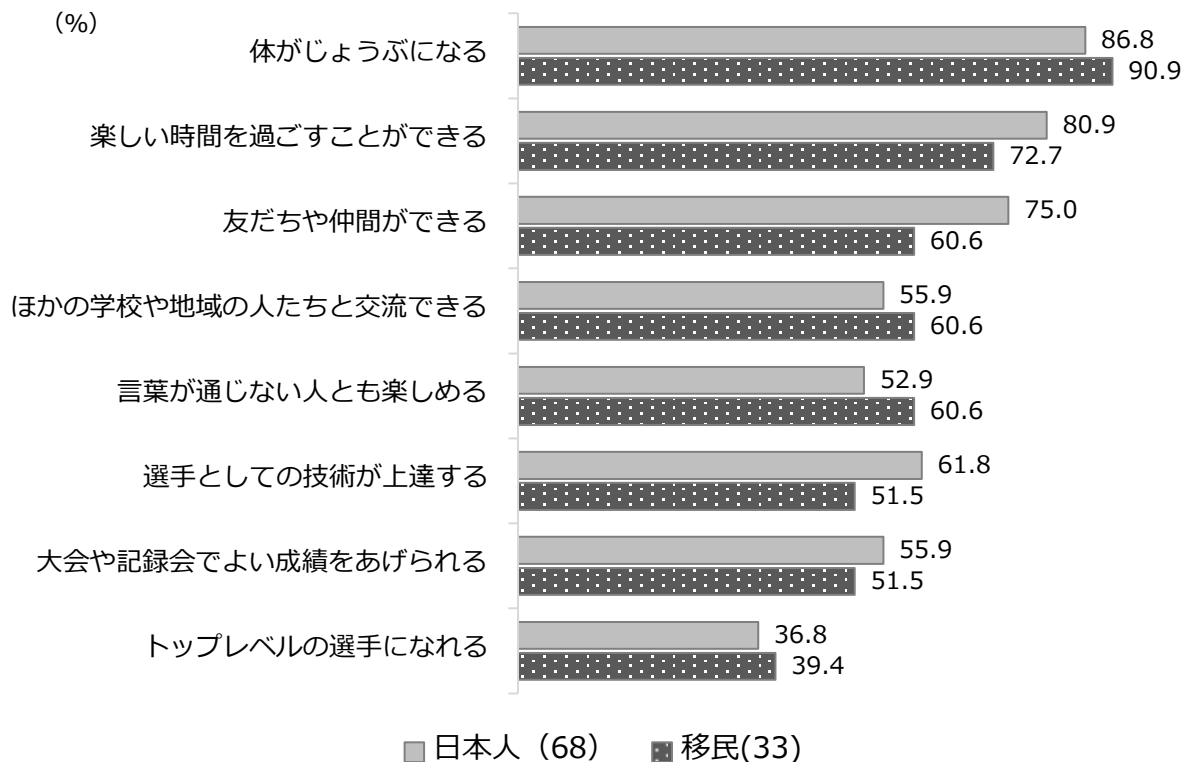


注)「とてもあてはまる」の%。

## 2.11 スポーツの価値

「あなたがスポーツをしたら、次のことができますか」という質問文を用いて、スポーツの価値についてたずねた(図表 2-11)。日本人・移民ともに「体がじょうぶになる」(日本人 86.8%、移民 90.9%)、「楽しい時間を過ごすことができる」(日本人 80.9%、移民 72.7%)が高く、ほとんどの児童が肯定している。ほかの項目もおよそ日本人と移民の傾向は共通しているが、「友だちや仲間ができる」は日本人 75.0%>移民 60.6%と、約 15 ポイントの差がみられた。一方で「ほかの学校や地域の人たちと交流できる」「言葉が通じない人とも楽しめる」はいずれも移民は 60.6%となり、日本人をわずかに上回る結果であった。

図表 2-11 スポーツの価値



注) 「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。



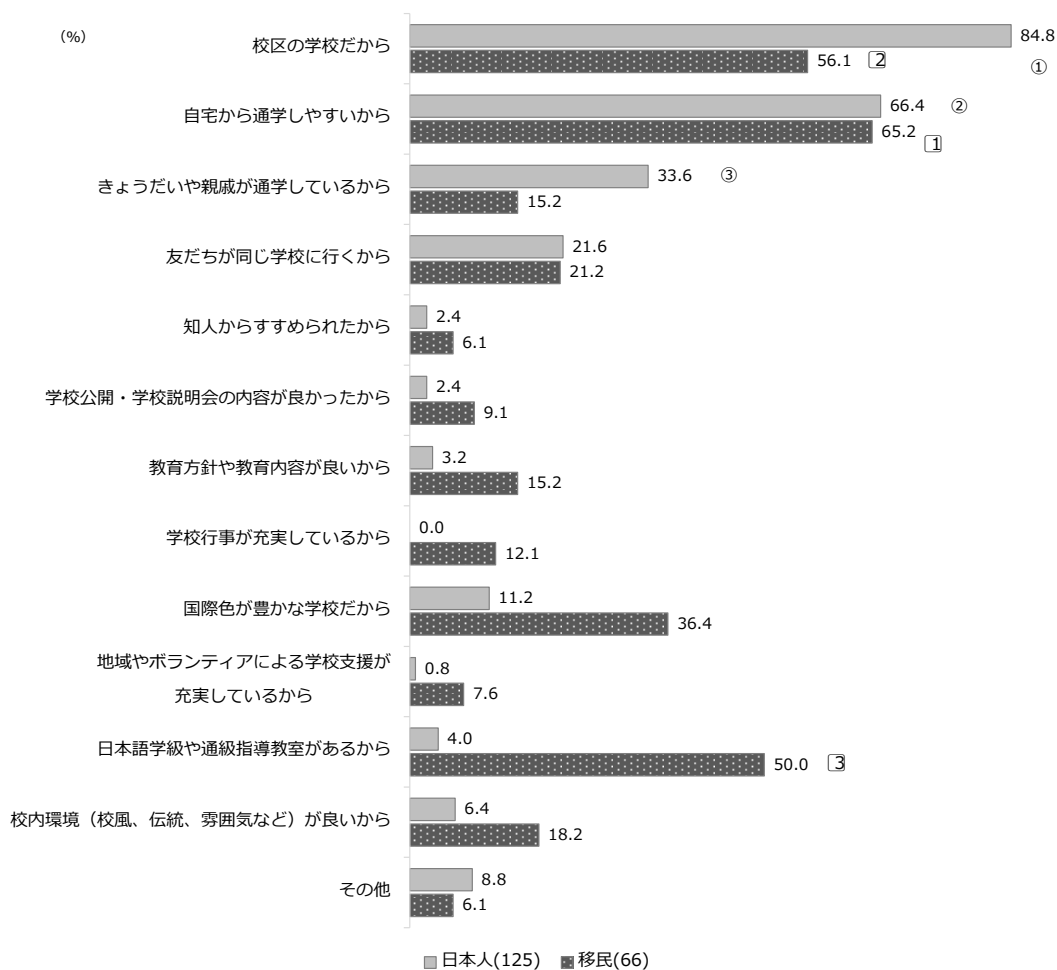
### 3. 保護者票(全学年)

#### 3.1 学校選択理由

区では学校選択制を実施しており、A 小学校でも 2 割強の保護者が入学前にほかの学校の情報収集や入学の検討をしている(日本人 29.6%、移民 22.7%、図表割愛)。子どもと保護者がどのような理由で A 小学校を選択したのか、複数回答でたずねた(図表 3-1)。

日本人では「校区の学校だから」84.8%、「自宅から通学しやすいから」66.4%、「きょうだいや親戚が通学しているから」33.6%の順に多く、地元の小学校であるために選ばれている様子がうかがえる。「その他」の具体的な記述でも、家族の母校だからという回答が複数みられた。一方で移民では、「自宅から通学しやすいから」65.2%、「校区の学校だから」56.1%に「日本語学級や通級指導教室があるから」50.0%や「国際色が豊かな学校だから」36.4%が続く。そのほかにも「教育方針や教育内容が良いから」(日本人 3.2%<移民 15.2%)、「校内環境が良いから」(日本人 6.4%<移民 18.2%)などでも差がみられ、移民のほうが A 小の具体的な特徴を選択理由にあげる傾向がみられる。

図表 3-1 学校選択理由



注1) 複数回答。

注2) 日本人・移民それぞれ上位 3 項目に、1~3 の番号を付している。

注3) 通級指導教室については、質問紙では A 小の具体的な名称を入れてたずねている。

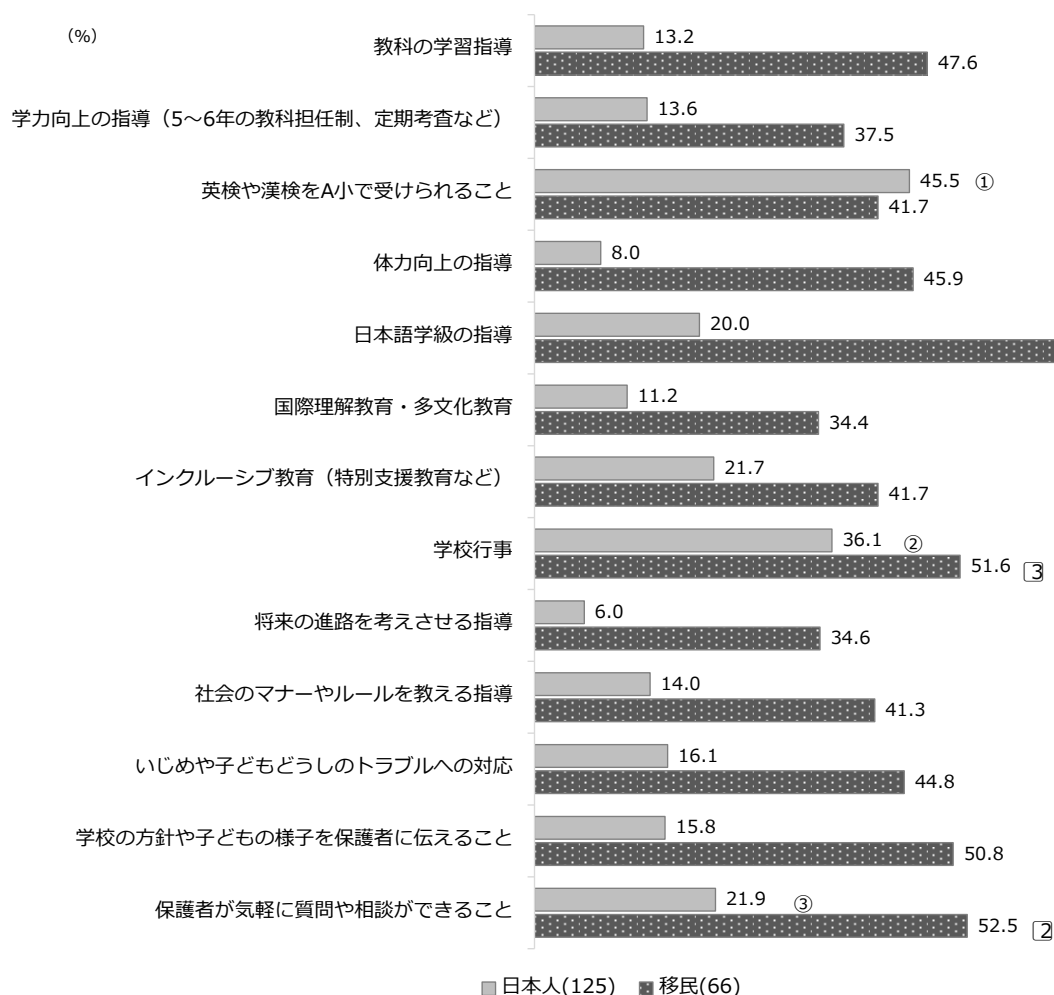
### 3.2 学校満足度

学校のさまざまな取り組みに対して、どの程度満足しているのかをたずねた(図表 3-2)。なお、学年によっては「わからない・受けていない」と回答する比率が高い項目がみられたため、本項ではすべての項目で「わからない・受けていない」を除外した上で「とても満足している」の比率を算出した。

日本人では「英検や漢検を A 小で受けられること」45.5%、「学校行事」36.1%、「保護者が気軽に質問や相談ができること」21.9%の順に高い。移民では「日本語学級の指導」67.9%、「保護者が気軽に質問や相談ができること」52.5%、「学校行事」51.6%と続き、特に日本語学級に対する満足度は非常に高い様子が見えらる。全体的に移民のほうが「とても満足している」の比率は高い。

日本人の回答をみると、「体力向上の指導」8.0%と「将来の進路を考えさせる指導」6.0%は 1 割を下回る。両者は「まあ満足している」を足し合わせると 7 割程度になるが、ほかの項目に比べると低く、今後の課題のひとつと捉えられる。

図表 3-2 学校満足度



注 1) 「とても満足している」の%。

注 2) 各項目「わからない・受けていない」と回答したケースを除外して集計している。

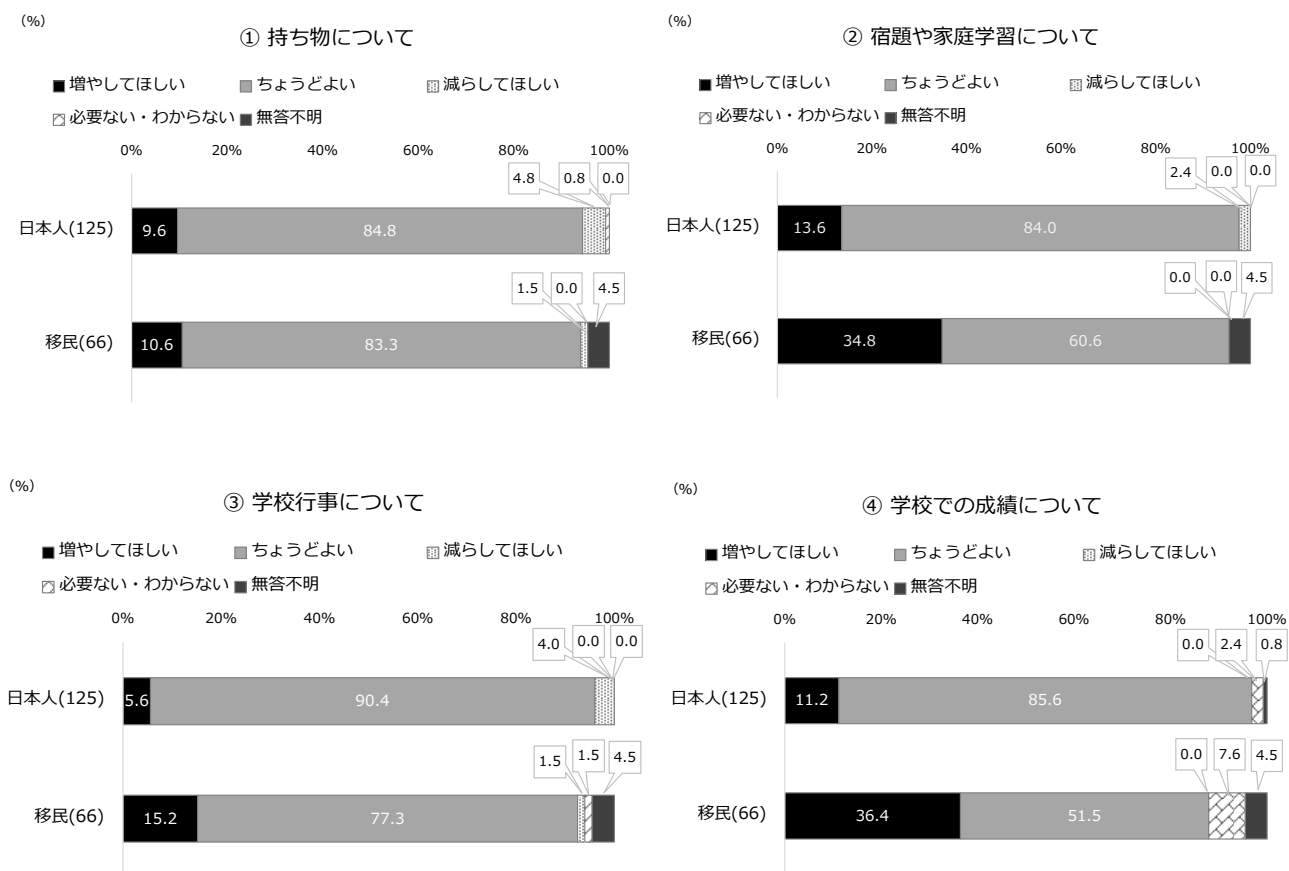
注 3) 日本人・移民それぞれ上位 3 項目に、1~3 の番号を付している。

注 4) 「国際理解教育・多文化教育」「学校行事」については、質問紙では A 小で使用されている具体的な名称でたずねている。

### 3.3 学校からの連絡

学校から保護者への連絡回数について、保護者の希望をたずねた(図表 3-3-1)。いずれの項目においても「減らしてほしい」「必要ない・わからない」は 1 割未満と少数で、「ちょうどよい」が最も多い結果となった。「増やしてほしい」の比率はいずれの項目でも日本人より移民のほうが高い。特に差が大きかったのは「宿題や家庭学習について」(日本人 13.6%<移民 34.8%)と、「学校での成績について」(日本人 11.2%<移民 36.4%)で、20 ポイント強の差がみられる。移民の保護者がより、学校からの連絡に対する希望や学習・成績への関心の高い様子がうかがえる。

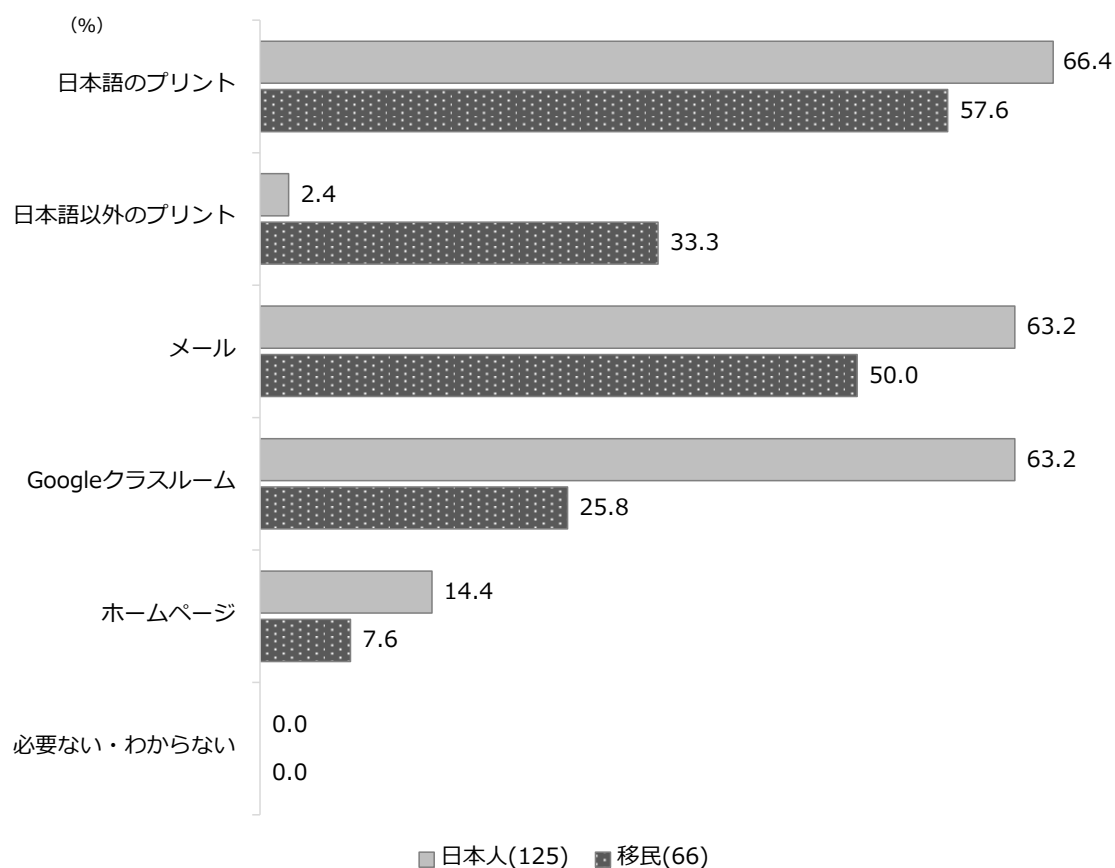
図表 3-3-1 学校からの連絡回数



学校からの連絡手段についても、保護者の希望をたずねた(図表 3-3-2)。項目には実際に A 小で使用可能な手段を取り入れ、複数回答の設問としている。日本人では「日本語のプリント」66.4%、「メール」63.2%、「Google クラスルーム」63.2%の 3 つがほぼ同率で高い数値となった。移民では「日本語のプリント」57.6%、「メール」50.0%を半数以上の保護者が希望し、次いで「日本語以外のプリント」33.3%が高かった。

調査設計時には、メールや Google クラスルームなどの IT を用いた連絡手段を希望する移民の保護者が多いと予想していたが、調査結果では 3 分の 1 が「日本語以外のプリント」を希望していた。移民の保護者の習慣や使用言語は多様であり、日本語のプリントが子どもから親に渡らないケース、渡っても親が読めないケースなども考えられる。保護者の実態にあわせた学校からの連絡手段の工夫、また、それを可能にする通訳や翻訳アプリを行政や民間が支援することが求められる。

図表 3-3-2 学校からの連絡手段



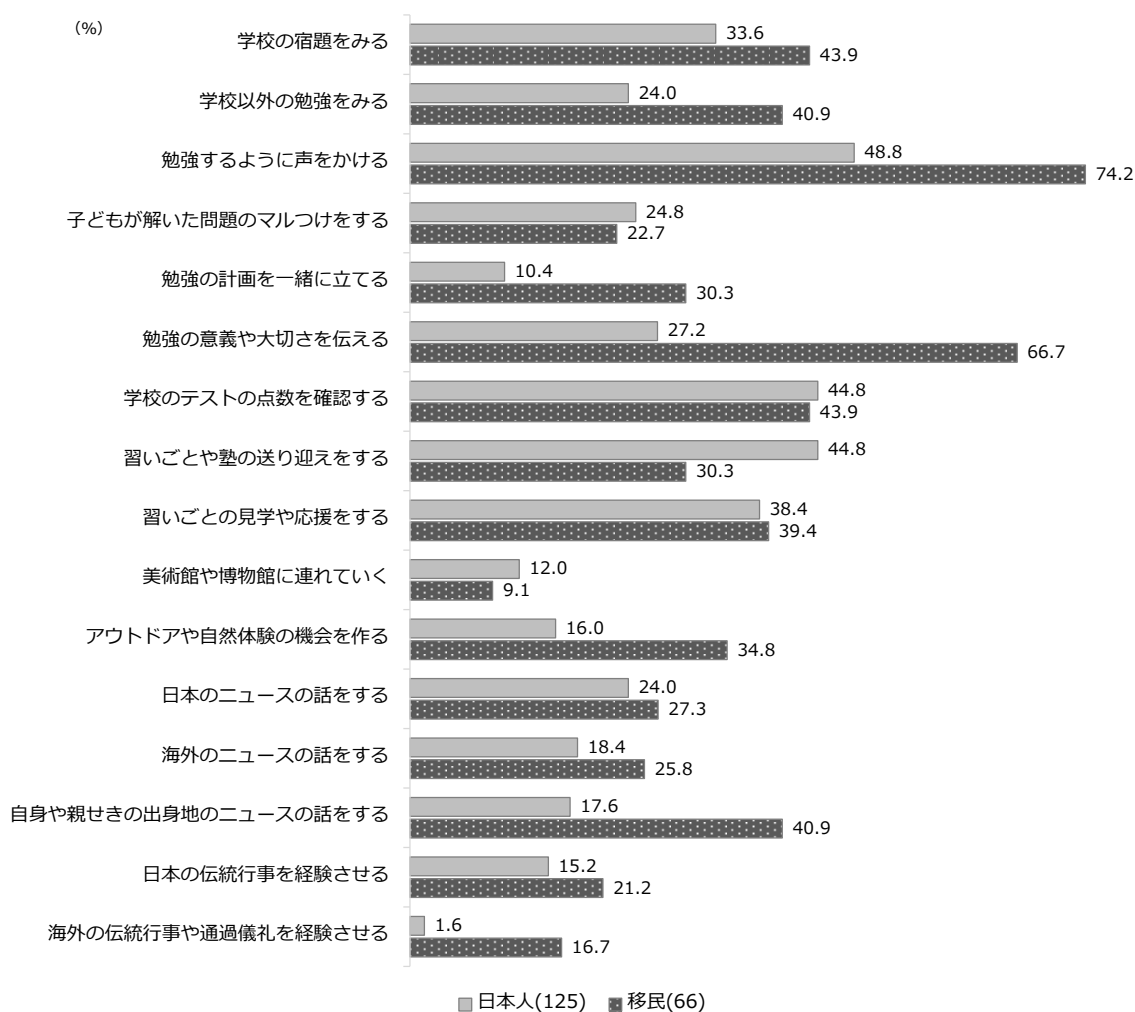
注) 複数回答。

### 3.4 教育戦略

保護者が子どもの勉強などに対してどのくらい関わっているのかをたずねた(図表 3-4)。全体的に移民のほうが数値の高い項目が目立ち、普段の勉強については「学校の宿題をみる」「学校以外の勉強をみる」「勉強するように声をかける」「勉強の計画を一緒に立てる」「勉強の意義や大切さを伝える」の 5 項目で、日本人を10ポイント以上上回っている。特に「勉強するように声をかける」「勉強の意義や大切さを伝える」は7割前後に達し、「よくする」の比率としては非常に高い。保護者の教育熱心さは移民の特徴として指摘されるところだが、本調査においても同様の傾向がみてとれる。

そのほかの項目についてみると、「アウトドアや自然体験の機会を作る」「自身や親戚の出身地のニュースの話をする」「海外の伝統行事や通過儀礼を経験させる」の 3 項目で、移民が日本人の数値を 10 ポイント以上上回る。また、「日本のニュースの話をする」や「日本の伝統行事を経験させる」でも、日本人と移民はほぼ同程度の関わりをしている様子が見えがえる。学業達成・地位達成の志向、出身国の文化の伝達や日本の文化への親しみなど、さまざまな目的から全体的に子どもに熱心に関わる移民保護者の姿が浮かび上がる。

図表 3-4 教育戦略



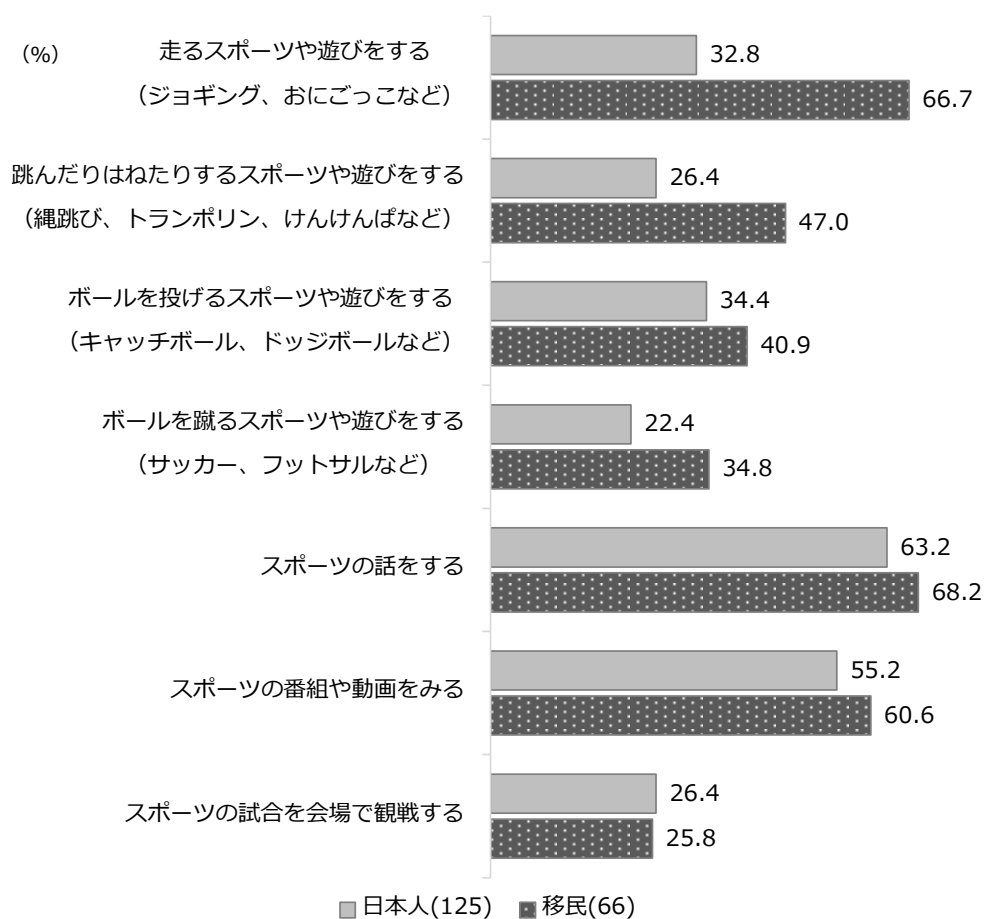
注) 「よくする」の%。

### 3.5 子どもとのスポーツ・運動遊び

子どもと一緒に取り組むスポーツや運動遊びについて、する・話す・みるの観点から7項目にわけて頻度をたずね、「よくする」と「ときどきする」の合計値を示した(図表 3-5)。するスポーツについては、「走るスポーツや遊びをする」(日本人 32.8%<移民 66.7%、以下同)「跳んだりはねたりするスポーツや遊びをする」(26.4%<47.0%)「ボールを投げるスポーツや遊びをする」(34.4%<40.9%)「ボールを蹴るスポーツや遊びをする」(22.4%<34.8%)の4項目いずれも移民のほうが高く、特に「走るスポーツや遊びをする」では日本人を30ポイント以上上回る。

一方で、話す・みるに関しては、「スポーツの話をする」(63.2%<68.2%)「スポーツの番組や動画をみる」(55.2%<60.6%)では移民のほうが若干高く、「スポーツの試合を会場で観戦する」(26.4%、25.8%)は同程度で、顕著な差はみられなかった。

図表 3-5 子どもとのスポーツ・運動遊び

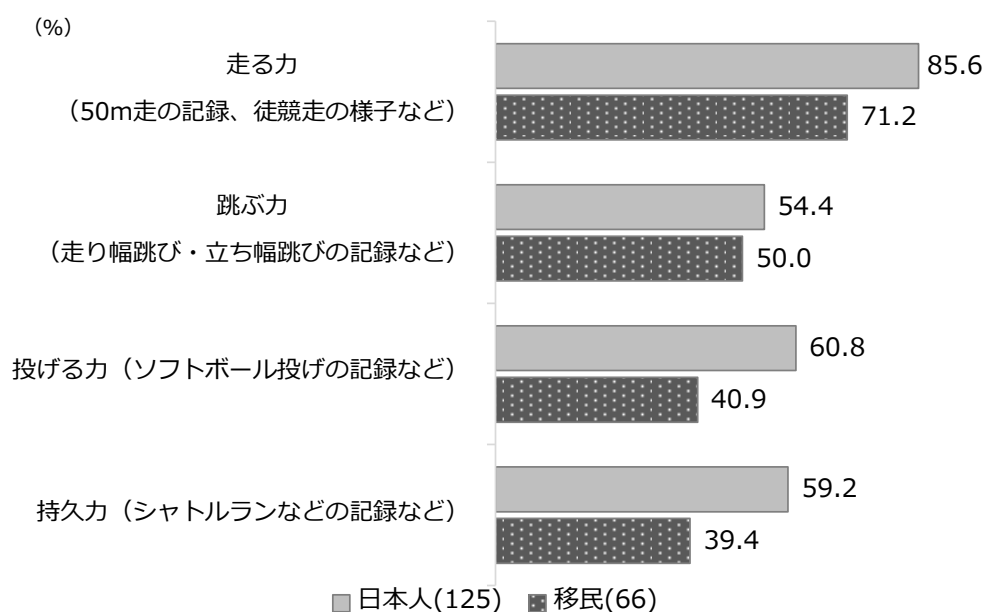


注) 「よくする」+「ときどきする」の%。

### 3.6 子どもの運動能力の認知

子どもの運動能力についてどのくらい知っているかをたずね、「よく知っている」と「だいたい知っている」の合計値を示した(図表 3-6)。「走る力」は日本人 85.6%、移民 71.2%と、差はあるもののいずれも多くの子の保護者が認知している結果であった。「跳ぶ力」は日本人 54.4%、移民 50.0%で、ともに半数程度が把握していた。「投げる力」「持久力」の認知度は、日本人が 6 割程度であるのに対して移民では約 4 割と、差がみられた。4 項目いずれも日本人のほうが知っている比率は高く、移民の保護者における体力テストの指標の馴染みのなさや、日本語の資料の難しさなどが背景にあると推察される。

図表 3-6 子どもの運動能力の認知

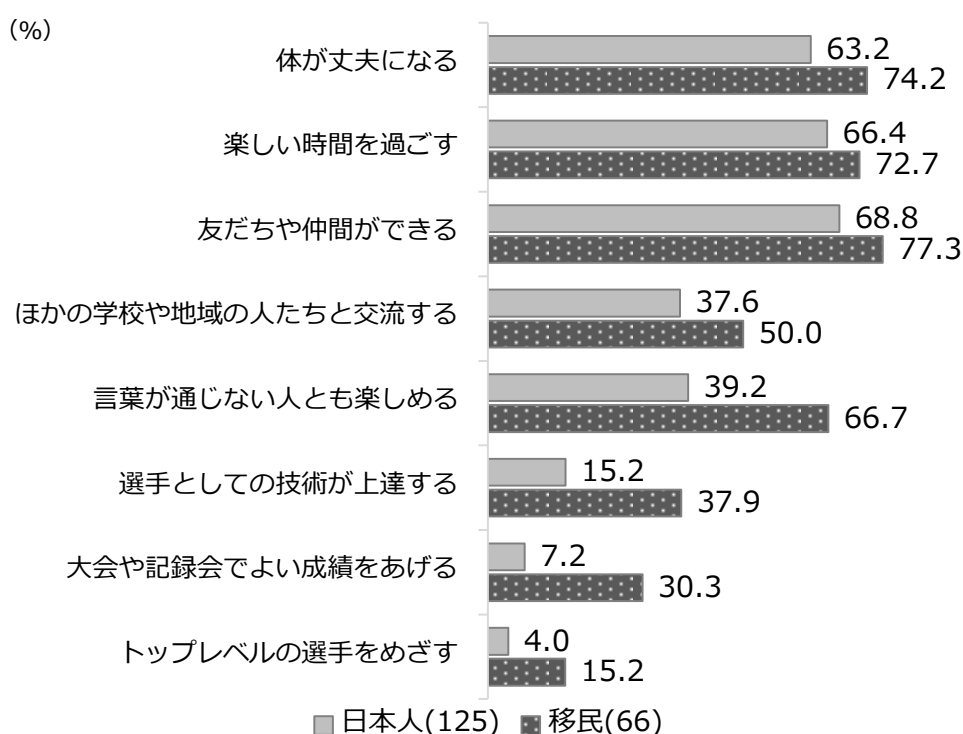


注) 「よく知っている」+「だいたい知っている」の%。

### 3.7 子どものスポーツへの期待

子どもの運動やスポーツについて、保護者がどのような期待をしているのかをたずねた(図表 3-7)。日本人・移民ともに「体が丈夫になる」「楽しい時間を過ごす」「友だちや仲間ができる」の比率が高く、6~7割台に達した。この3項目を含め、すべての項目で移民の保護者の数値が高く、子どものスポーツにさまざまな期待をしている様子がうかがえる。特に差が大きかったのは「言葉が通じない人とも楽しめる」(日本人 39.2% < 移民 66.7%、27.5ポイント差、以下同)、「選手としての技術が上達する」(15.2% < 37.9%、22.7ポイント差)、「大会や記録会でよい成績をあげる」(7.2% < 30.3%、23.1ポイント差)であった。児童にたずねたスポーツの価値の項目(2章 11節参照)では、日本人に比べて移民の評価が低い項目も散見されたが、保護者においては対照的に移民の期待が高い結果となった。

図表 3-7 子どものスポーツへの期待



注) 「とても期待する」の%。



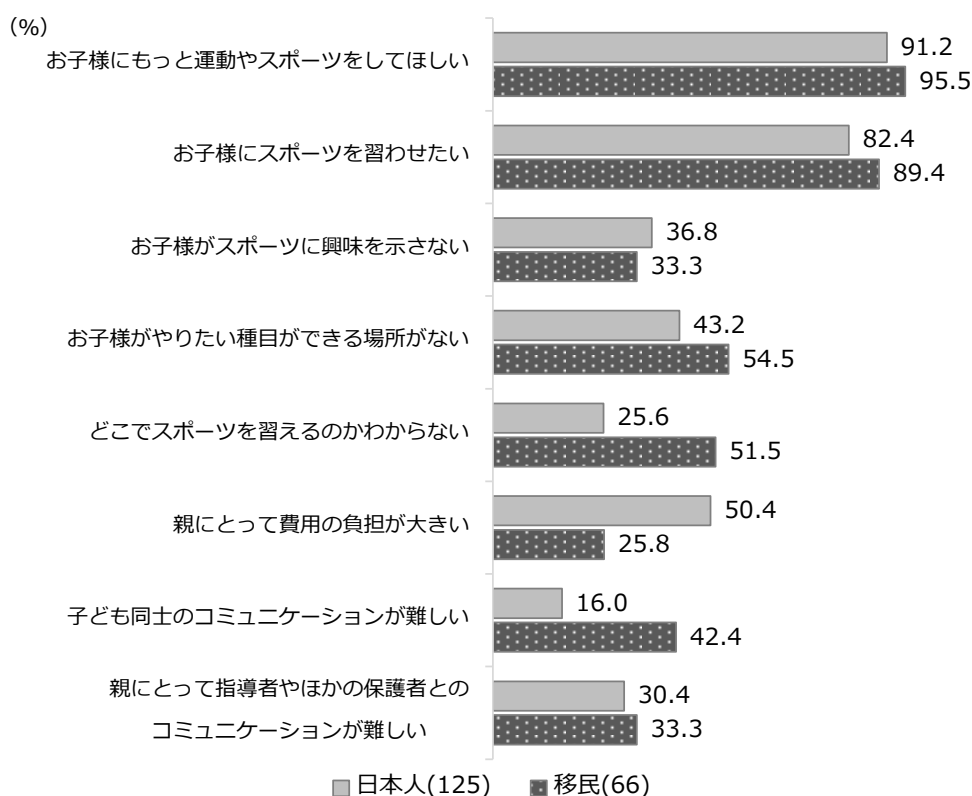
### 3.8 子どものスポーツに関する悩み

子どものスポーツに関する悩みをたずねた(図表 3-8)。日本人・移民ともに「お子様にもっと運動やスポーツをしてほしい」「お子様にスポーツを習わせたい」が 8 割～9 割強に達している。一方で「お子様がスポーツに興味を示さない」はいずれも 3 割強が「そう思う」と回答し、出身国の背景にかかわらず、多くの保護者が子どもにスポーツをしてほしいと希望しつつ、なかなか子どもが関心を示さない状況を悩ましく思う様子がうかがえる。

スポーツのできる環境についてたずねた「お子様がやりたい種目ができる場所がない」「どこでスポーツを習えるのかわからない」はいずれも移民のほうが高く、5 割に達している。保護者を対象にした別の調査でも、地域に密着したクラブチームが見つげづらく、情報が得られないことで苦勞する保護者の姿が明らかにされているが、移民の保護者にとってはさらに大きな課題といえる。

反対に「親にとって費用の負担が大きい」は日本人 50.4%>移民 25.8%と、日本人のほうが高い。家庭の経済状況に加え、具体的な費用の検討をしているか否か、情報が得られているかという点も関係していると推察される。親子のコミュニケーションについては、日本人では「子ども同士のコミュニケーション」よりも「親にとってのコミュニケーション」が難しいと答える比率が高く、移民では反対に「子ども同士のコミュニケーションが難しい」と回答する比率のほうが高かった。

図表 3-8 子どものスポーツに関する悩み

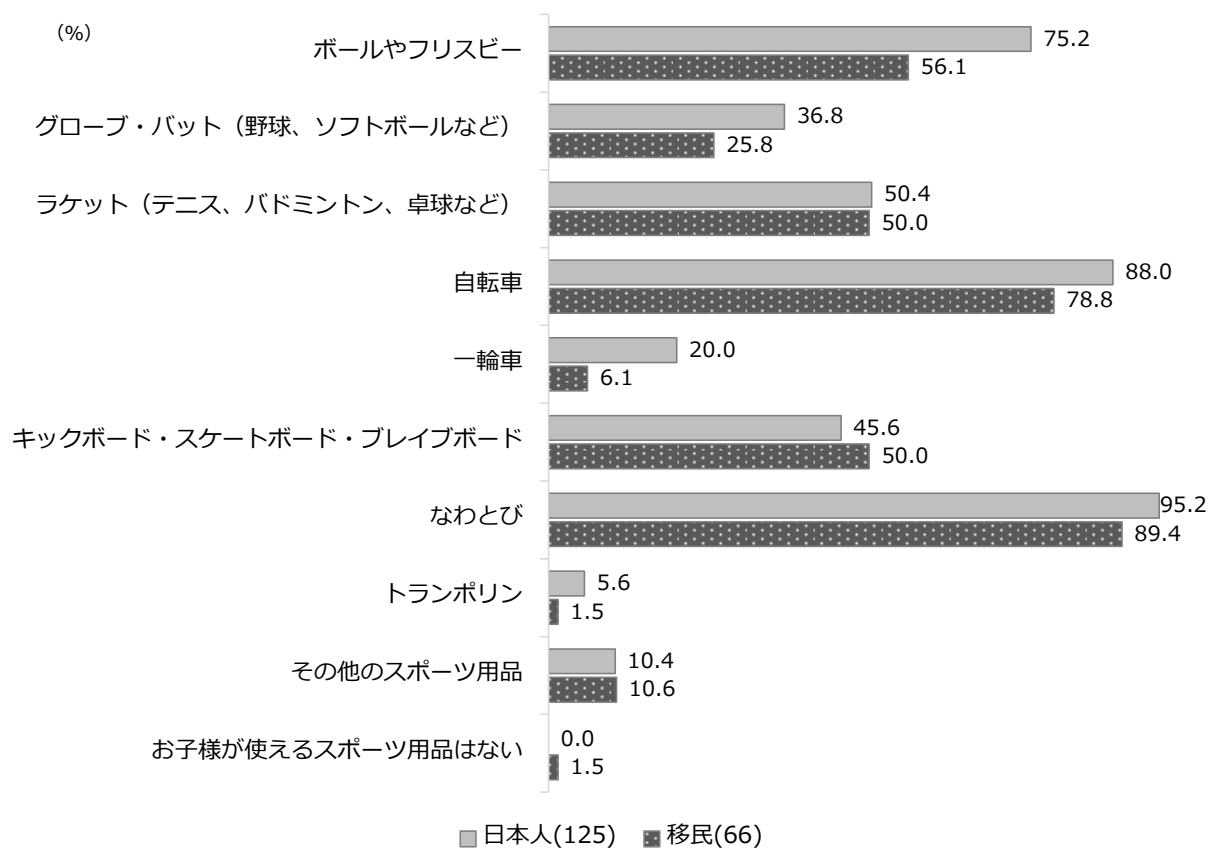


注) 「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

### 3.9 家庭にあるスポーツ用品

自宅にある、子どもが使えるスポーツ用品についてたずねた(図表 3-9)。日本人・移民ともに「なわとび」が9割前後、「自転車」が8割前後と、多くの家庭で子どもたちが使用できる状態にある。「ボールやフリスビー」(日本人75.2%>移民56.1%、以下同)、「グローブ・バット」(36.8%>25.8%)、「一輪車」(20.0%>6.1%)は、日本人家庭の所有率が高い。「その他のスポーツ用品」には、フラフープやウィンタースポーツ用品などがあげられた。「お子様が使えるスポーツ用品はない」を選択した比率はごくわずかであった。

図表 3-9 家庭にあるスポーツ用品



注 1) 複数回答。

注 2) トランポリンは「その他の用品」の具体的な回答から抽出した。

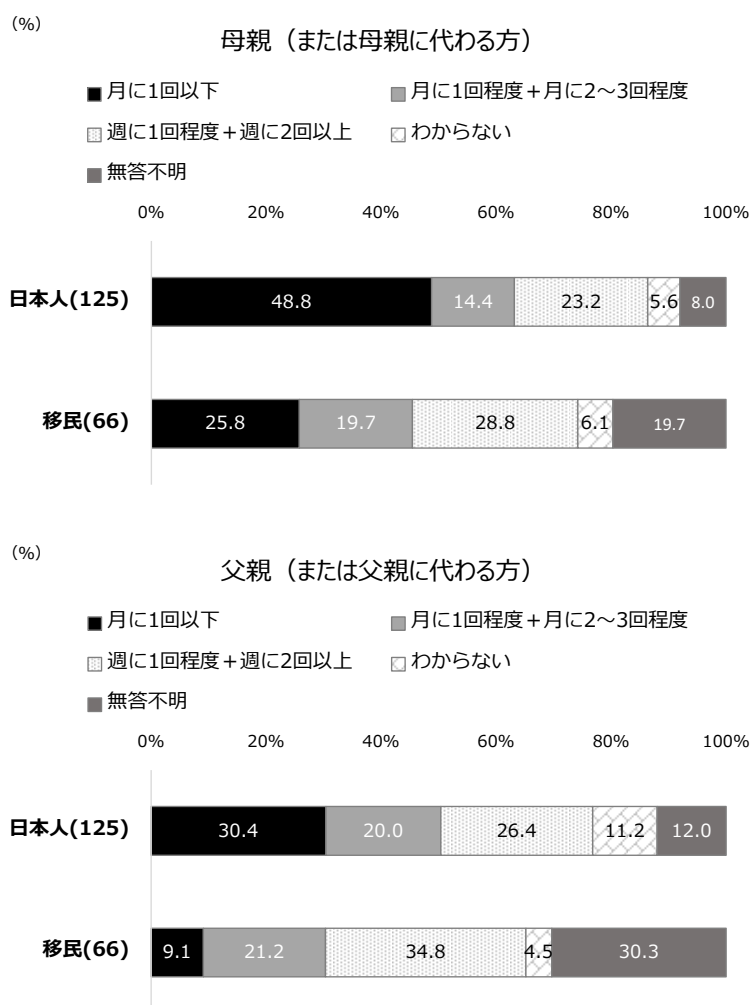
### 3.10 保護者のスポーツ実施頻度

保護者が普段、1回あたり30分以上の運動やスポーツをどのくらい実施しているかをたずねた(図表3-10)。なお、ひとり親や別居などで該当する人がいない場合には無記入にしてもらったため、無回答率がほかの質問項目に比べて高い。

母親の結果をみると、日本人は「月に1回以下」が48.8%と最多で、「週に1回程度」と「週に2回以上」を合わせた23.2%が続き、半数近くがほとんど運動・スポーツを実施していないことがわかる。移民では「月に1回以下」が25.8%で、運動・スポーツをほとんど実施していない母親は4分の1程度にとどまる。なお、「無答不明」を除外して集計しても同様の傾向がみられ、日本人のほうが「月に1回以下」が20ポイント以上高かった(図表割愛)。

父親も同様で、日本人では「月に1回以下」30.4%、「週に1回程度」と「週に2回以上」を合わせた26.4%と続くが、移民では「週に1回程度+週に2回以上」34.8%、「月に1回程度+月に2~3回程度」21.2%の順で、「月に1回以下」は9.1%にとどまる。父親の集計においても、「無答不明」を除外した場合でも「月に1回以下」は日本人のほうが20ポイント以上高い。日本人の保護者の運動・スポーツ実施頻度の低さが浮き彫りになる結果であった。

図表 3-10 保護者のスポーツ実施頻度



## 速報版のまとめ

---

本報告は調査の速報値であり、分析・考察を追加して2024年度内に報告書を発刊する予定である。本報告では掲載できなかった体力テストや他学年の児童票の結果も加味して、国際化が進む公立小学校における運動・スポーツの実態をより明らかにしていきたい。

速報版のまとめとして、本調査の意義と課題を整理したい。

第一に、本調査の分析結果は、学校の取り組みの評価や改善に資するものである。外国につながる児童の増加は、ときに学校や地域にとってのマイナスイメージとして語られるケースもあるが、本調査からは「移民」「日本人」の違いを超えて、多くの保護者が積極的にA小を選択・評価し、児童は学習内容が将来役に立つ、学校ではすぐに友だちができるなどポジティブな認識をする様子が明らかになった。保護者の2〜3割が他言語を第一言語とするA小においては、日々の学習・生活指導、保護者への連絡や面談等、コミュニケーションに配慮が必要な場面は多岐にわたる。そのような環境でも児童に向き合い続けた教職員の取り組み、日本語学級の教員や通訳の役割、さらには地域やボランティアのサポートがこのような結果につながったと考えられる。関係者それぞれの立場で、本調査をもとに今後の改善点を発見してもらえれば幸いである。

第二に、国内の移民に焦点をあてたスポーツの研究が非常に少ない状況で、先駆的な調査を実現した点である。移民は全国にまんべんなく居住するのではなく、集住地域と非集住地域があり、集住地域は流入時期や人口規模などによって複数の類型に定義される。子どもに関しては教育の領域で移民の研究が進んでいて、多くの研究者がさまざまな類型における調査を積み重ねている。一方でスポーツの領域においては、移民に焦点をあてた研究は成人が中心で、調査された事例も限定的である。本調査は、アジア系コミュニティの発達した大都市部の公立小学校という一事例を取り上げたにすぎないが、スポーツの研究としては貴重な一歩を踏み出すことができたと考える。

最後に調査の目的に立ち返って、外国につながる子どもたちは日本で普段どのような運動・スポーツを経験しているのか、日本国内でスポーツを通じた国籍を超えた共生は実現されているのかを考えたい。現時点での結論は、「実現しているとは言い難い」である。先行研究でもスポーツ実践がエスニシティによって分断される報告がなされているが、本調査でも公園をはじめ区や学校の施設でより多く遊ぶ「日本人」とプライベートな空間でより多く遊ぶ「移民」、学校内外でおにごっこやドッジボールを楽しむ「日本人」と少人数でも楽しめるバドミントンや自転車遊びの実施率が高い「移民」などの結果が目される。言語の障壁に加えて種目への馴染みの有無や子ども同士の関係性、放課後の過ごし方に対する保護者の価値観などさまざまな要因は考えられるが、スポーツを通じて共生に近づくというよりは、普段の過ごし方やコミュニティの違いがそのままスポーツや運動遊びにも反映されている結果と読み取れる。

一方で、体育における水泳やボール運動の人気、日常の遊びにおけるサッカーの人気、スポーツの価値など、子どもの背景にかかわらず評価の高い内容もみられる。筆者が拝見したボール運動の授業では、日本語の会話がほとんどできない児童が、ボールを使った練習が始まると目を輝かせて夢中になる場面がみられた。楽しく身体を動かす経験は、多くの子どもたちを魅了する。この先、子どものスポーツの課題と可能性の両方をより明確に示すためにも、さらなるデータ分析が必要である。

調査結果の説明にあたっては、「移民」「日本人」という区分別を用いざるを得ないが、それぞれの短所を指摘する意図はなく、子どもたちが同じ学校に通いながらも異なる運動やスポーツの経験をしている実態を示したいと考えている。今後、「国際化が進む公立小学校」はさらに増加し、「国際化」の度合いも今の比ではない時代がくるだろう。その時に、スポーツ関係者には何ができるのか。まずは本調査がそのきっかけになるように努めたい。

本事業にあたり、児童・保護者の皆様には多大なご協力を賜りました。心より感謝を申し上げます。

## 参考文献

- 国立教育政策研究所「OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA)」<https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/>  
文部科学省,2018,『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 体育編』。
- 額賀美紗子・三浦綾希子・高橋史子・徳永智子・金侖貞・布川あゆみ・角田仁,2022,『外国につながる生徒の学習と進路状況に関する調査報告書—都立高校アンケート調査の分析結果—』,東京大学大学院教育学研究科。
- 額賀美紗子・芝野淳一・三浦綾希子編著,2019,『移民から教育を考える—子どもたちをとりまくグローバル時代の課題—』,ナカニシヤ出版。
- 岡沢祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎,1996,「運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究」『スポーツ教育学研究』16(2):145-155。
- 笹川スポーツ財団,2017,『小学生のスポーツ活動における保護者の関与・負担感に関する調査研究』。
- 植田俊,2014,「ニューカマー外国人との『共生のまち』づくりに向けた社会関係の再編におけるスポーツに関する研究—愛知県豊田市保見団地におけるフットサルコート の設立と利用をめぐる—」『SSF スポーツ政策研究』3(1),pp134-141。
- 植田俊・松村和則,2013,「セーフティネット化する移民のスポーツ空間—群馬県大泉町のブラジル・フットサル・センター (BFC) の事例—」『体育学研究』58(2),pp445-461。
- A 小学校ウェブサイト。
- A 小学校令和 5 年度学校要覧。

---

**東京 23 区内 A 小学校 共同研究**  
**国際化が進む公立小学校における子どもの運動・スポーツ実態調査（速報値）**

2024 年 3 月発行

発行者 公益財団法人 笹川スポーツ財団

〒107-0052 東京都港区赤坂 1-2-2 日本財団ビル 3 階

TEL 03-6229-5300 FAX 03-6229-5340

E-mail [info@ssf.or.jp](mailto:info@ssf.or.jp) URL <https://www.ssf.or.jp/>

---

無断転載、複製および転載を禁止します。引用の際は本書が出典であることを明記してください。

本事業は、ポートルースの交付金による日本財団の助成金を受けて実施しました。